平 成 27 年 度

研　究　紀　要

第　95　集

徳島県立総合教育センター

は　じ　め　に

現代は，新しい知識・情報・技術が社会のあらゆる分野での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す，いわゆる「知識基盤社会」の時代であり，将来の予測が困難かつ複雑な，変化の激しい社会であります。このような社会で求められるのは新たな視点や発想に基づく価値を創造し，自ら考え行動できる人間です。とりわけ本県においては，人口の加速度的な減少が懸念されるなか，地方創生の原動力となる「人づくり」を支える教育の推進を最重要課題と位置づけています。

本県では，平成２７年１２月に「徳島県教育大綱」を策定し，大きな夢や高い目標を持って，困難にぶつかっても挑戦し続け，未来を切り拓いていく，「人財」の育成を目指して，挙県一致体制で「徳島ならでは」の教育を推進していくことを定めました。

当センターにおいても，「学校支援機能」，「教職員支援機能」，「特別支援・相談機能」，「生涯学習支援機能」，「教育情報化支援機能」の５機能を生かして，児童生徒を取り巻く社会的な背景や当面する教育課題を踏まえて研究を進め，ここに「平成２７年度　研究紀要第９５集」として，発刊する運びとなりました。御高覧の上，御意見や御指導をいただくとともに，これらの研究の成果を，教育研究，教育実践，研修等のための資料として御活用いただければ幸いです。

結びになりましたが，これらの研究を進めるにあたり，御指導・御協力をいただきました各学校ならびに関係機関の皆様に，厚くお礼申し上げます。

平成２８年３月

徳島県立総合教育センター
所　長　　松　山　隆　博

目　　次

授業力向上に向けての取組
―「授業実践事例集」の作成における研究 ―
～主体的に学習する児童生徒を育てるための授業づくり～・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

大学・研究機関等研修における効果の検証・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

学力向上に向けた研修講座運営マニュアル
―研修講座の充実を図るために―・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

行動の偏りを伴う不登校児童生徒への教育相談の在り方（中間報告）
―発達障がいの特性を踏まえた相談対応の手引きの開発―・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

子ども参加型体験講座の充実に向けた研究実践
―親子（家族）で参加できる体験型講座による若い世代の生涯学習の推進―・・・・・・・・・47

教育情報システムを利用した教員の資質向上について
―研修申込みシステムの機能追加とその活用―・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59

授業力向上に向けての取組

―「授業実践事例集」の作成における研究 ―

～主体的に学習する児童生徒を育てるための授業づくり～

学校経営支援課　松永 健治　植原 浩之
市瀬 佐代　藤山 三樹

要　　旨

経験年数の浅い教員の授業技術を向上させるため，３年計画で，授業実践に役立つ具体的な事例集を作成することにした。１年次である平成26年度は，「とくしま授業技術の基礎・基本」を作成した。２年次の本年度は，児童生徒が主体的に学ぶ授業づくりに必要な技術として，具体的な授業実践事例集を作成した。

キーワード：授業点検シート，主体的な学び，学習規律，学習形態の工夫，
進度・学力差への対応，学習の見通し・振り返り

Ⅰ　はじめに

経験年数の浅い教員の基礎的・基本的な授業技術を向上させるため，学校経営支援課義務教育担当では，平成26年度に「とくしま授業技術の基礎・基本」を作成した。本研究は，３年間の継続研究で，１年次「教師が授業中に必要とする授業技術」２年次「児童生徒を主体的に取り組ませるために必要とする授業技術」３年次「教師が授業前，授業後に行う授業技術」の計画のもと，本年度が２年次に当たる。

１年次である昨年度，授業力向上研修（教職２年目）の教員を対象に「授業点検シート」「授業振り返りシート」を用いたアンケート調査を行い，経験年数の浅い教員が求める授業技術は何かを把握し，まずは「教師が授業中に必要とする授業技術」に絞った基礎・基本の手引を作成した。その経緯等は，本センター研究紀要第94集にまとめた。２年次は，その続編として，児童生徒を主体的に取り組ませるために必要な授業技術を研究し，授業実践事例集の作成を進めてきた。

Ⅱ　研究の実際

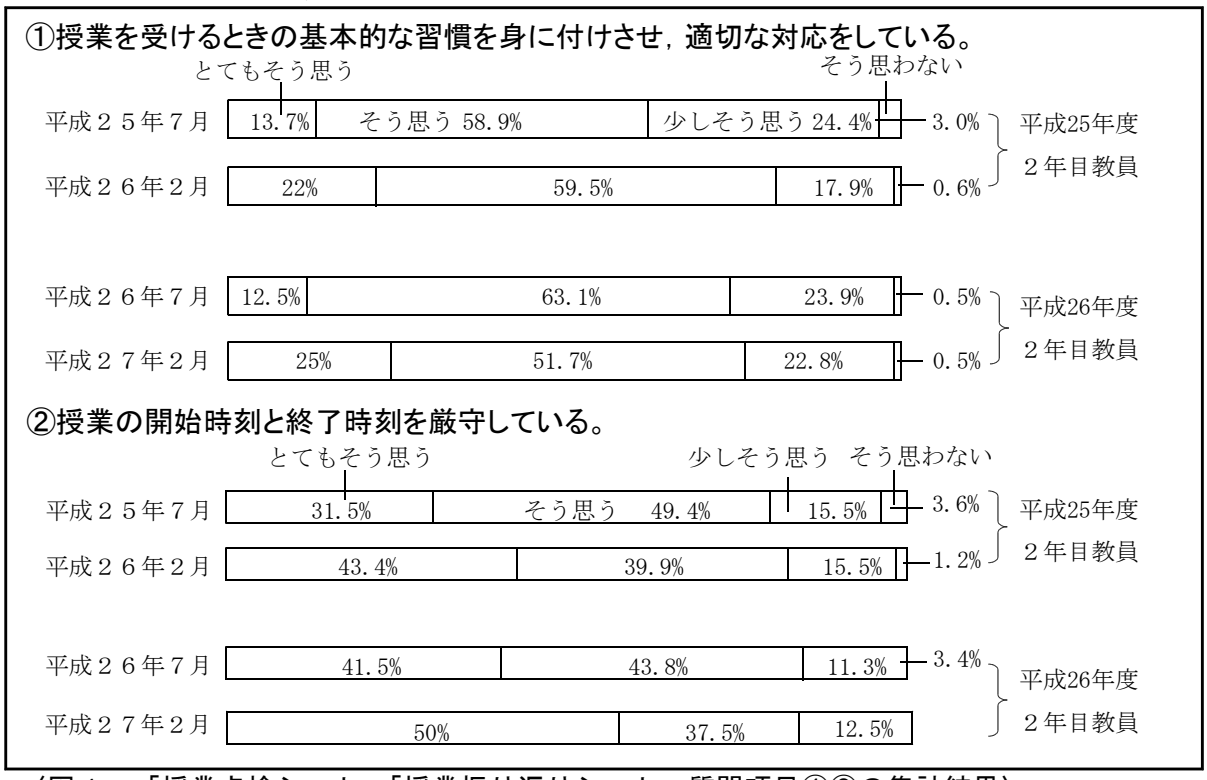
（１）昨年度に作成した「授業実践事例集（とくしま授業技術の基礎・基本)」を本センターのWebページに掲載し，各小・中学校，高等学校，特別支援学校が校内研修等に使用できるようにした。また，本センターで行う基本研修（初任者研修，授業力向上研修，教職５年次研修，10年経験者研修）において，当事例集を用いた指導を行い，内容の共通理解と周知を図った。さらに，授業力向上研修（教職２年目）の受講者に，当事例集についてのアンケート調査を行い，よりニーズに合った事例集に改善するための情報を得た。

（２）昨年度の続編として，「主体的に学習する児童生徒を育てるための授業づくり」を作成し，「学習規律」「学習形態の工夫」「進度・学力差への対応」「学習の見通し・振り返り」の４項目についてまとめた。

Ⅲ　学習規律について

１　授業点検シート・授業振り返りシートの分析から

平成25年度・平成26年度のそれぞれの年度の教職２年目の教員を対象に，授業点検シートを用いた振り返りを実施し，分析を行った（図１参照）。学習規律に関わる項目「①授業を受けるときの基本的な習慣を身に付けさせ，適切な対応をしている。」について，平成25年・26年度の両年度で７月より翌年２月の回答の方が，「とてもそう思う」「そう思う」の回答の合計が増加した。つまり，経験を積むにつれ，学習規律の確立を図るための取組ができるようになっていることが分かる。しかし，翌年２月の回答において，「少しそう思う」「そう思わない」と捉えている教員が，20%前後存在することも事実であり，取組への難しさを感じている教員の割合が多いことも分かる。また，「②授業の開始時刻と終了時刻を厳守している。」については，平成25年・26年度の両年度で，翌年２月においても「少しそう思う」「そう思わない」と捉え，時刻厳守のできていない教員が，10%以上存在することも分かった。



〈図１　「授業点検シート」「授業振り返りシート」質問項目①②の集計結果〉

また，授業力向上研修の実施報告書において，次のような記述が見られた。

○子供を理解し，学級の学習ルールを教師が明確に示す必要があり，児童が落ち着いて学習に取り組めるようにしたい。（小学校）

○聞くときは聞く，話すときは話す，活動するときは活動するというように，授業のルールづくりを徹底することで，メリハリのある授業を行いたい。（中学校）

○生徒の活動の際，メリハリがつかなくなってしまい，授業のルールが徹底できないことがあるので，学習ルールを徹底したい。（中学校）

このことから，若手教員が学習規律の確立を図ることの重要性を意識していることが明らかになった。そこで，学習規律の確立を図るために大切なポイントを３つに絞って示すこととした。

2　学習規律についての３つのポイント

（１）隗より始めよ

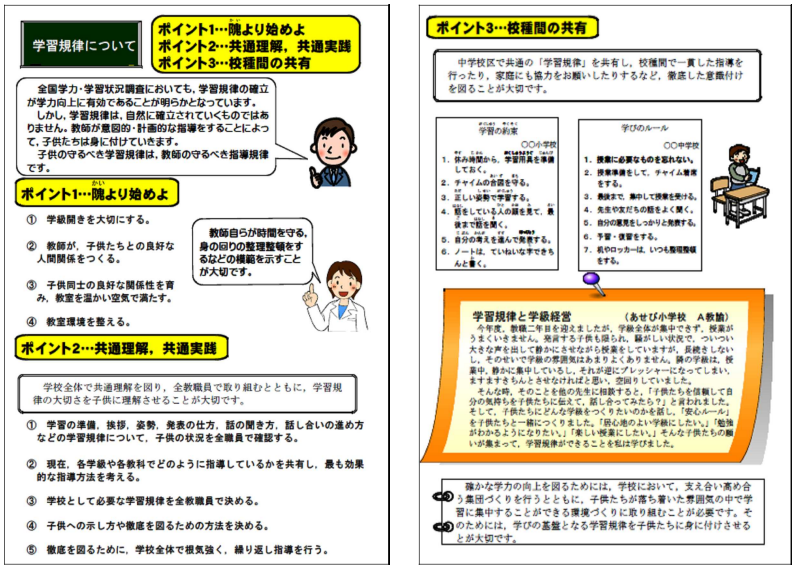
児童生徒にとっての学級は，「安心・安全で楽しい場所」であることが最も大切である。授業中騒がしい，集中できないなどの雰囲気があれば，安心して学ぶことができない。生活習慣と学習習慣，自己肯定感と学力は密接な相関関係があり，学習規律はそれらを高めるためにも必要不可欠である。そこで，児童生徒が安心して学ぶ環境を確保し，学習活動を支障なく進めることができる学習規律が必要である。学習規律は，学級集団の中で自然に確立されていくものではなく，教師の意図的・計画的な指導によって身に付けていくものである。そして，児童生徒の守るべき学習規律は，教師が守るべき指導規律でもある。学習規律を確立させるためには，教師自らが，まず模範を示すことが求められる。

（２）共通理解，共通実践

学力の向上を図るためには，支え合い高め合う集団づくりを行うとともに，児童生徒が落ち着いた雰囲気の中で学習に集中することができる環境づくりに取り組む必要がある。そのためにも，学習の準備，挨拶，姿勢，発表の仕方，話の聞き方，話し合いの進め方などの学習規律について，児童生徒の状況を全教職員で確認するとともに，現在，各学級や各教科でどのように指導しているのかを共有し，効果的な指導方法を考えていくことが大切である。また，児童生徒への示し方や徹底を図るための方法を確認し，学校全体で根気強く，繰り返し指導を行っていくことも必要である。学校全体で共通理解を図り，全教職員で取り組むとともに，学習規律の役割を児童生徒に理解させることが大切である。

（３）校種間の共有

小中学校のなめらかな接続は，児童生徒が，落ち着いて学習に取り組むことにつながり，学習効果も上がる。小中連携を進め，学習規律についての情報交換を積極的に図り，同じ視点で児童生徒を見守ることが大切である。



〈図２　学習規律についてのリーフレット〉

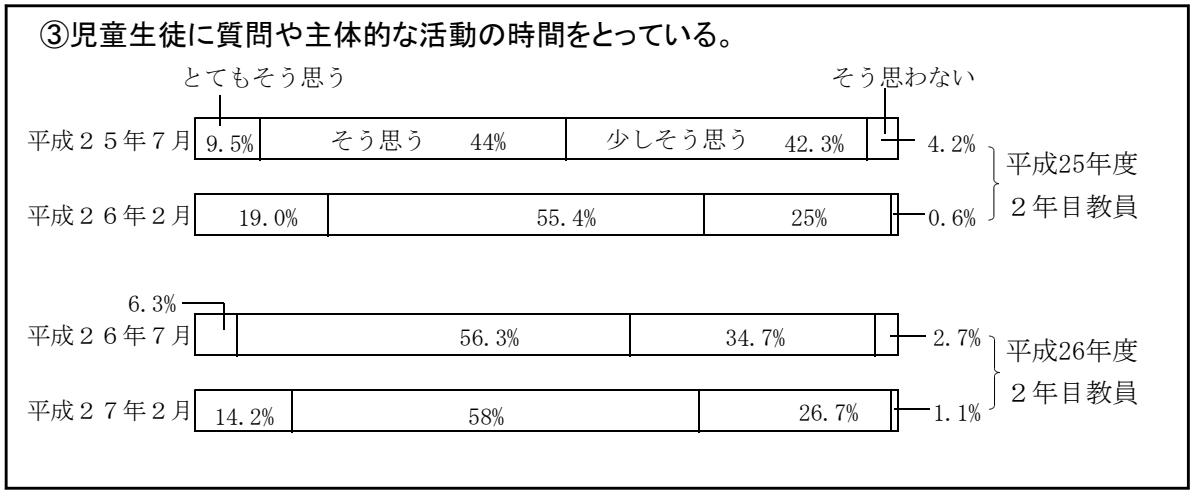
3　主体的に学習する児童・生徒を育てることと学習規律について

確かな学力の向上を図るためには，学校において，支え合い高め合う集団づくりを行うとともに，子供たちが落ち着いた雰囲気の中で学習に集中できる環境づくりに取り組むことが必要である。そのためには，学びの基盤となる学習規律を子供たちに身に付けさせることが大切である。そして，そのような学級の雰囲気の中で，主体的に学ぶ意欲も育つのである。

Ⅳ　学習形態の工夫について

１　授業点検シート・授業振り返りシートの分析から

学習形態に関わる項目「(③) 児童生徒に質問や主体的な活動の時間をとっている。」については，７月より翌年２月の回答の方が，「とてもそう思う」「そう思う」の回答の合計が増加した。また，中でも「とてもそう思う」という回答が，２倍近く増えており，授業実践を積み重ねるにつれて，主体的な活動の時間をとることが大切だと認識している教員が増加したことが分かる。その一方で，平成26年，平成27年ともに，２月の段階でも，「少しそう思う」「そう思わない」と答えた教員が25%～28%存在した。児童生徒の主体的な活動の時間をとることが十分にできていない教員が３割近く存在するということは大きな課題である（図３参照)。



〈図３　「授業点検シート」「授業振り返りシート」質問項目③の集計結果〉

また，授業力向上研修実施報告書において，次のような記述が見られた。

○班活動が十分に機能していなかったので，日頃から目的意識を持った班活動を行い，自分の意見が言えたり，友達の意見をしっかりと聞けたりするように指導する。(中学校)

○グループ活動などを取り入れ，生徒同士の話し合いによって考察を深める形を実践する。(高校)

○班活動をこれからも状況に応じて，適宜取り入れていきたい。生徒たちが共に学び合い，教え合いができる集団づくりを目指して頑張っていく。(中学校)

○普段の授業にペア学習やグループ学習を積極的に取り入れる。(小学校)

○日頃から学習者一人一人の状況を正確に見取っていきたいと思う。それに併せて，今回はペアでの学習であったが，グループ活動，学級全体など伝え合う場の人数や状況を変えていき，話したり聞いたりする力が確実に育つようにしたい。(小学校)

○ペア活動だけでなくグループ活動の場も取り入れ，相互評価の時間を取り入れることも必要であると感じる。グループ活動は，自己表現に自信がない児童も無理なく発表できるという点でも有効ではないかと考える。どの児童も楽しんで取り組めるような場づくりをしていきたい。(小学校)

このように，報告書から，学習形態の工夫を行うことが学習活動を円滑に進め，学習効果を上げることにつながることを教員が理解しながらも,実践方法に苦慮していることが分かってきた。

そこで，学習形態の工夫については,「学習目標にあった学習形態」「事前・活動中・事後における教師の支援」という２つのポイントにまとめた。

2　学習形態の工夫についての２つのポイント

（１）学習目標にあった学習形態

学習者が課題の発見，解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（アクティブ・ラーニング）を効果的に行うための指導方法として，学習形態の工夫は大切である。

児童生徒にどんな力を付けるのか，１時間の目標を明確にし，その目標を達成するための学習活動としてふさわしい学習形態をとることが学習効果を高める。例えば，クラスで一つの案を生徒会に提案する場合，話し合う目的は互いの意見を一つにまとめることになる。また，読書の感想の交流であれば，互いの感想から共通点や相違点などを学ぶことが目的になる。学習形態には，ペア型，グループ型，コの字型などがあるが，どの形態を選択するのが効果的かを事前に十分考えておくことが求められる。

（２）事前・活動中・事後における教師の支援

学習形態を変化させるときには，必ず事前指導で活動内容やねらいを明確に指示をすることが大事である。また，学習活動時には，集団のそれぞれを観察し，適宜アドバイスを行うことが必要であるとともに，参加できない児童生徒への配慮も考えなければならない。

〈実践例〉

①　ペア・ グループ学習の場合

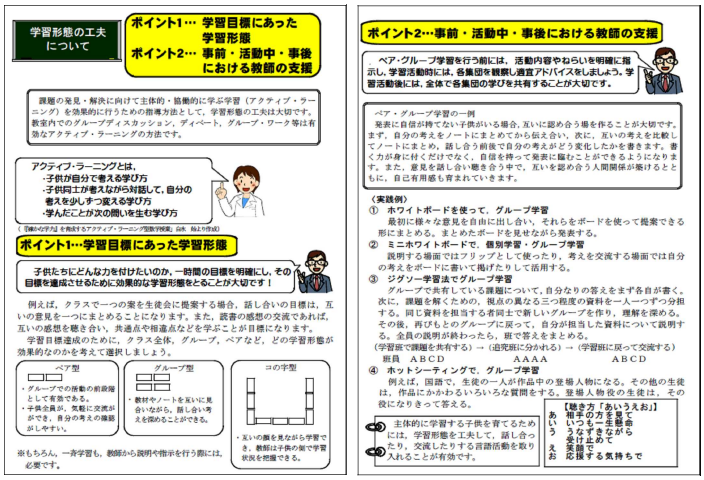
まず自分の考えをノートにまとめ次に互いの考えを比較し，最後に話し合いの前後で自分の考えがどう変化したかを書く。

②　ホワイトボードでグループ学習

意見を出し合った後，提案する形にまとめていき，全体に提示しながら発表する。

③　ミニホワイトボードで学習

フリップとして使ったり，交流の場面で自分の考えを書いたボードを掲げたりする。



〈図４　学習形態への工夫についてのリーフレット〉

④　ジグソー学習法でグループ学習

グループで共有する課題について，自分なりの答えをまず書く。次に，課題を解くため視点の異なる３つ程度の資料を一人一つずつ分担し，同じ資料を担当する者同士で新しいグループをつくり理解を深める。その後，再びもとのグループに戻り自分が担当した資料について説明する。全員の説明が終わったら，班で答えをまとめる。

⑤　ホットシーティング

例えば，生徒の一人が作品中の登場人物になり，登場人物役は，その役になりきり，皆からの質問に答える。

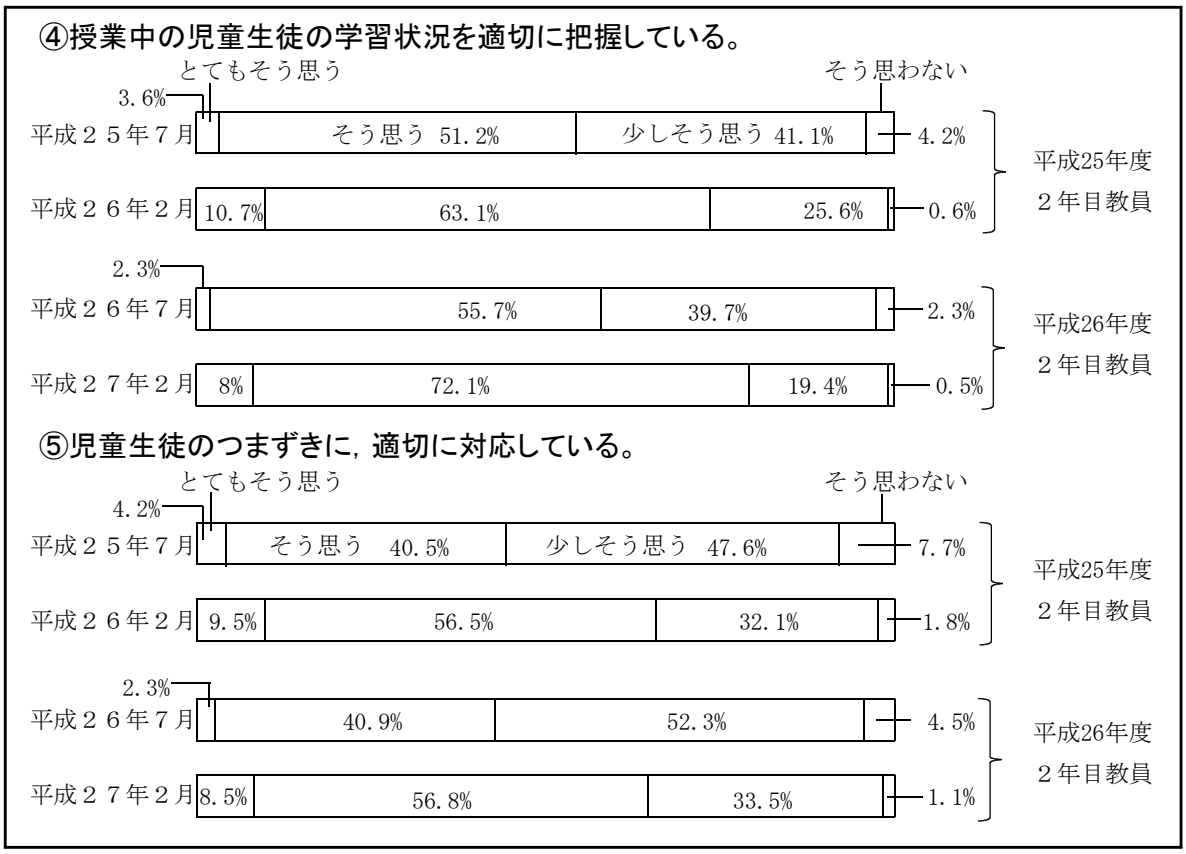
3　主体的に学習する児童・生徒を育てることと学習形態について

主体的に学習する児童・生徒を育てるためには，授業において学習形態の工夫を行い，一人一人が自分の考えを発表したり，班で話し合ったり，全体で交流したりする言語活動を取り入れることが有効である。

Ⅴ　進度・学力差への対応について

１　授業点検シート・授業振り返りシートの分析から

進度・学力差への対応に関わる２つの項目「④授業中の児童生徒の学習状況を適切に把握している。」「⑤児童生徒のつまずきに，適切に対応している。」について，いずれの項目も，７月より２月の回答の方が，「とてもそう思う」「そう思う」の回答の合計が増加している。経験を積むにつれて，児童生徒の状況をつかめていると感じていることが分かる。しかし，２月の回答においてもなお20～30％前後の教員が，「少しそう思う」「そう思わない」と回答しており，課題も見られた。この２項目は，７月の段階から「少しそう思う」「そう思わない」と答える割合が高く，難しさを感じている若手教員が多かった。これらの傾向は，平成25年・26年度の両年度に共通している。



〈図５　「授業点検シート」「授業振り返りシート」質問項目④⑤の集計結果〉

また，若手教員の授業力向上研修実施報告書には，次のような意見も見られた。

○実態把握をもとに，つまずくポイントを予想し，解決に導けるような教材を用いる。適切な児童の実態把握と実態に合った教材の研究を改善のテーマとして取り組みたい。（小学校）

○授業に参加できていない生徒への声かけやフォローが少ないとの指摘をいただいた。全体が見えるように心がけて授業を行いたい。（高校）

○ティームティーチングの先生に，自分で把握しきれていない生徒のつまずきなどの学習状況を聞いて，自分にフィードバックして授業改善に努めていきたい。（特別支援学校）

このように，若手教員が，進度・学力差への対応が難しいと考えている現状から，進度・学力差の対応について，「ころばぬ先の杖」「つまずき予想」「個別指導」の３つのポイントにまとめた。

2　進度・学力差への対応についての３つのポイント

（１）ころばぬ先の杖

学習のねらい（目標）を明確にし，見通しを持って学べるようにしたり，児童生徒の実態をよく把握し，校種・学年・教科の特性に応じたよりよい問題提示をしたりすることは大切である。児童生徒の進度・学力差への対応については，個別指導の在り方をまず想起しがちだが，個別指導に至るまでに，上記のようなことを準備しておくことが必要である。

（２）つまずき予想

児童生徒のつまずきに適切に対処するためにも，教材研究は重要である。本時に予想されるつまずきの解決方法をあらかじめ想定し，個別指導か全体指導かを見極める。なお，個人差があるからといって，最初から考え方を教え込むと児童生徒自身に考える力が身に付かない。考えさせることと教えることを見極めた上で支援をする。その判断も教材研究にかかっている。

（３）個別指導

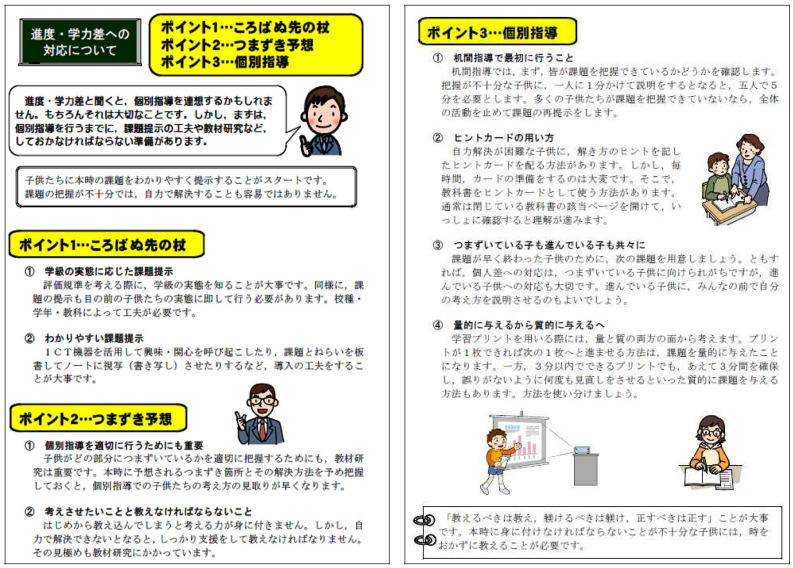
①　机間指導で行うこと

もし，多くの児童生徒が問題の把握をできていないのであれば，全体の活動を止めて問題の再提示を行う。

②　ヒントカードの用い方

自力解決が困難な児童生徒に対し，教科書をヒントカードとして使う方法がある。教科書を開けて，一緒に確認すると理解が進む。

③　つまずいている子も進んでいる子も共々に



〈図６　進度・学力差への対応についてのリーフレット〉

課題が早く終わった児童生徒のために，次の課題を用意する。ともすれば，個人差への対応は，つまずいている児童生徒に向けられがちだが，進んでいる児童生徒への対応も大切である。進んでいる児童生徒に考え方を説明することを求めるのもよい。

④　量的に与えるから質的に与えるへ

学習プリントを用いる際には，量と質の両面から考えるようにする。プリントを次々と解かせる方法は，課題を量の面から与えたことになる。一方，３分以内でできるプリントでも，あえて３分間を保障し，絶対に誤りがないように何度も見直しをさせるという質の面から課題を与える方法もある。

3　主体的に学習する児童生徒を育てることと，進度・学力差への対応について

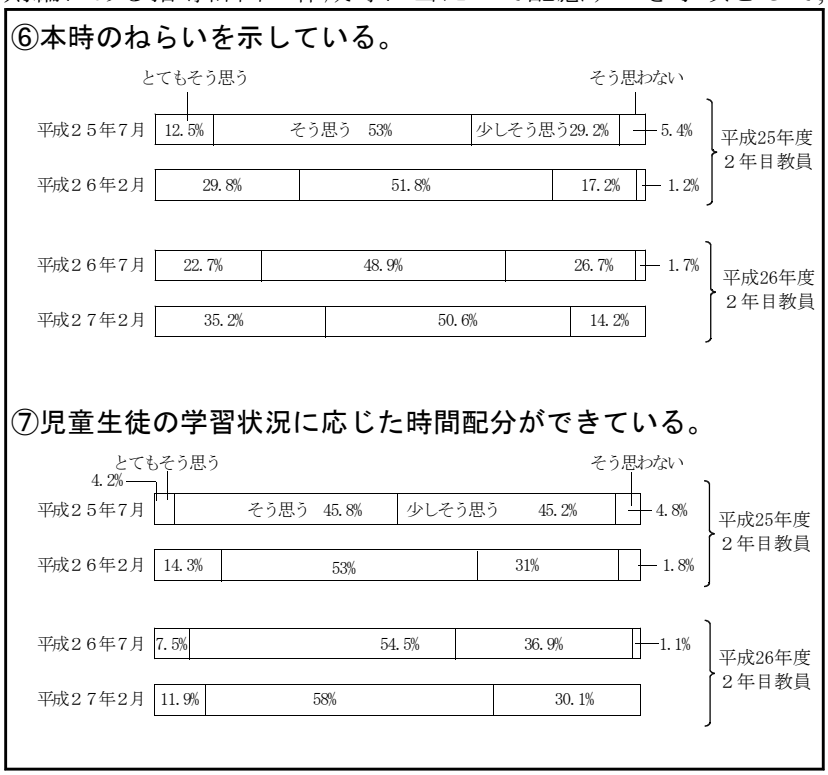
主体的に問題を解決する児童生徒を育てるためにも，授業中の学習状況を把握し，個々のつまずきに適切に対応することが求められる。児童生徒自身が，自ら考え，気付き，分かったと実感できることで，知識は真に定着する。個別指導といっても教師が一方的に教えるのではなく，自ら分かったと思えるような指導を心がけて，児童生徒の自信と次への意欲を育てるようにする。

Ⅵ　学習の見通し・振り返りについて

１　授業点検シート・授業振り返りシートの分析から

学習の見通し・振り返りに関わる２つの項目「⑥本時のねらいを示している。」「⑦児童生徒の学習状況に応じた時間配分ができている。」について，いずれの項目も，７月より２月の回答の方が,「とてもそう思う」「そう思う」の回答の合計が増加している（図７参照)。若手教員が，児童生徒に「見通し」を持たせたり,「時間配分」の重要性を認識したりするようになったことが窺える。

また，学習指導要領には，総則編にある指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項として,「各教科等の指導に当たっては，児童(中学校は生徒)が学習の見通しを立てたり,学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるよう工夫すること(中学校は「取り入れるようにすること」)」が示されている。また，全国学力・学習状況調査においても「見通し・振り返り学習」を積極的に行った学校ほど記述式問題(活用に関して問うＢ問題)の正答率が高い傾向にあることが報告されている。そこで，学習の見通し・振り返りについて「見通し」「振り返り」の２つのポイントにまとめた。



〈図７「授業点検シート」「授業振り返りシート」質問項目⑥⑦の集計結果〉

２　学習の見通し・振り返りについてのポイント

「見通す・振り返る」学習活動は，日々の授業展開の中で当然行われなければならないことである。しかし，上記のアンケートでは，現実には十分できていないことが窺える。児童生徒自身が，その授業において「何を学ぶのか」「なぜ学ぶのか」「どのように学ぶのか」を理解し，結果として授業で「何を学んだのか」「どのような意味があるのか」を実感できるようになっているかが大切である。そのためには，学年・単元又は学習のまとまり・毎時間等の中で指導者の立場での「見通し・振り返り」に加え，学習者の立場での「見通し・振り返り」も明確に捉えておく必要がある。

（１）「見通し」のポイント

①　目標分析

学習指導要領や各学校で付けたい資質・能力等から目標を明確にすることが大切である。そして,「教えたいこと」を「学びたいこと」に変える工夫をする必要がある。

② 何を・なぜ学ぶのか

単元や授業を通した課題意識を持たせたり，児童生徒自身から疑問が生まれる工夫をする。

③ どのように学ぶのか

学習の流れを提示したり，モデルを提示したりする。

④ 導入の工夫

前時の振り返りを活用し，目標は分かりやすい具体的な文言で示す。

（2）「振り返り」のポイント

① 自己評価

分かったことなどを自分の言葉で記述させたり，「分かったこと・できたこと」だけでなく，「よく分からなかったこと」や「もっと調べたいこと」なども書くようにすることも大切である。また，記述内容の質を高めるためには，教師からの評価と指導が重要である。

② 「見通し」と対に

「見通し」と「振り返り」がつながるように，振り返る視点を児童生徒に示したり，振り返りの時間をしっかり確保したりすることが大切である（めあてに合ったまとめにする）。

③ 板書・ノートの工夫

めあてや思考の過程等が見える板書を行ったり，丁寧なノート指導を行ったりすることで，振り返りが充実する。

④ 内容を吟味し，指導改善に生かす

児童生徒の振り返りを吟味することで，教師自身の指導を振り返り，次の指導に生かすことができる（PDCAで次時へつなぐ）。

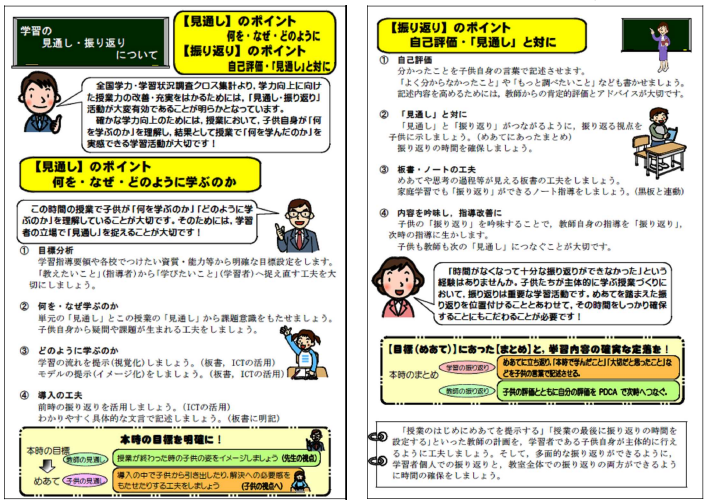
3 主体的に学習する児童生徒を育てることと「見通し・振り返り」学習活動について

「見通し・振り返り」学習活動と言語活動を適切に組み合わせることで，主体的に学習する児童生徒を育てる学習指導が展開される。

授業の導入段階で，児童生徒に学習の見通しを確実に持たせ，展開段階で，めあてに沿って一人一人に自分で考えさせ(自力解決)，自分の考えをもとに，話し合い(練り上げ)をさせていく。つまり，児童生徒自身が，筋道を立てて考え話し合ったり，実験のレポートを論述したりした後，まとめの段階で，学習活動や学習内容を振り返ることである。この学習活動が確実にできれば，児童生徒は毎時間の主体的な学びを深めることができると考える。

また，「見通し・振り返り」における言語活動は，「話す・書く」という表現行為であり，見通しが振り返りの質を高め，充実した振り返りが次の活動への見通しを持たせることにつながっていく。

したがって，「見通し・振り返り」活動の充実は，主体的に学習する児童生徒を育てる上で重要な役割を果たす活動であると考える。



〈図８ 学習の見通し・振り返りについてのリーフレット〉

Ⅶ　研究の成果と課題

平成25年・26年度の教職２年目の教員を対象に「授業点検シート」「授業振り返りシート」を用いた振り返りを行い，経験年数の浅い若手教員が抱いている授業づくりへの課題を収集した。１年次の取組[*1]に加え，平成27年度は，児童生徒が「主体的に学習するための方策」について扱うこととし，「学習規律」「学習形態の工夫」「進度・学力差への対応」「学習の見通し・振り返り」の４項目について「とくしま授業技術の基礎・基本２」[*2]にまとめた。これは，総合教育センターで行う基本研修（初任者研修，授業力向上研修，教職５年次研修，10年経験者研修）で研修資料として用いたり，校内研修等で活用したりすることを想定しており，本センターのWebページにも掲載している。

また，授業力向上研修受講者を対象に１年次に作成した「とくしま授業技術の基礎・基本」[*3]の活用状況についてアンケート調査（図９参照）を実施し，冊子の改善点や研究の３年次に向けた課題を知る機会とした。本研究は３年間の継続研究であり，調査結果と改善点や課題については，３年次の研究で明らかにしていく予定である。これらの取組が若手教員の授業力向上に寄与するよう研究を続けていきたい。

授業力向上研修受講の皆様へ

このアンケート調査は，授業力向上研修を受講する先生方を対象に，研修で使用した「とくしま授業技術の基礎・基本」の活用状況を把握するとともに，授業の事前準備や授業後の評価等における不安や悩みを調査することによって，今後の研修内容に生かしていくことを目的とするものです。

＊所属校種に○を付けてください。　所属校種等：小　中　高　特　養

＊Q１～７の質問項目について，当てはまる回答選択肢の【　】に○を付けてください。また，その他については具体的に記述してください。

Q１　「とくしま授業技術の基礎・基本」は，活用しましたか。
①とても活用した【　】　②少し活用した【　】
③あまり活用していない【　】　④活用していない【　】

Q２　Q１で①・②と回答した方に質問します。
「とくしま授業技術の基礎・基本」は，役立ちましたか。
①とても役立った【　】　②少し役立った【　】
③あまり役立っていない【　】　④役立っていない【　】
⑤その他【　】

Q３　Q２で①・②と回答した方に質問します。その理由を選んでください。（※複数回答可）
ア　授業改善に役立った【　】　イ　児童生徒の学習意欲の喚起が図られた【　】
ウ　校内研修等で役立った【　】
エ　その他【　】

Q４　Q２で③・④と回答した方に質問します。その理由を記述してください。
理由［　］

Q５　Q１で③・④と回答した方に質問します。その理由を記述してください。
理由［　］

【裏面に続きます】

Q６　「とくしま授業技術の基礎・基本」について，内容や構成，活用方法等について改善への意見があれば記述してください。
［　］

Q７　授業の事前準備（授業構想等）や授業後の事後指導等を行っていく中での，不安や悩みについて質問します。

次の①～⑥のどの項目に，不安や悩みがありますか。当てはまる回答選択肢の【　】に○を付けてください。（※複数回答可）また，回答した項目について，具体的に記述してください。

①教材研究（例：教材・教具・ワークシートの作成など）【　】
［（具体的に）　］

②学習指導案の作成【　】
［（具体的に）　］

③学習評価（例：評価規準・評価方法など）【　】
［（具体的に）　］

④児童・生徒理解と学習指導
（例：学習への意欲づけ・授業後の指導・家庭学習指導など）【　】
［（具体的に）　］

⑤その他
［（具体的に）　］

〈図９　活用状況のアンケート〉

---

*1 徳島県立総合教育センター『研究紀要第94集』，2014年，1～10頁
（http://www.tokushima-ec.ed.jp/研究紀要/）。

*2 徳島県立総合教育センター「とくしま授業技術の基礎・基本２」，2015年，
（http://www.tokushima-ec.ed.jp/教職員支援/学力向上関係資料/）。

*3 徳島県立総合教育センター「とくしま授業技術の基礎・基本」，2014年，（同上）。

参考文献

・徳島県教育委員会「平成27年度初任者研修のしおり」，2015年
・徳島県教育委員会「平成27年度授業力向上研修の手引」，2015年

大学・研究機関等研修における効果の検証

学校経営支援課　田上 裕之　村田 光（現富岡東高等学校）

要　　旨

徳島県立総合教育センターにおける教職員支援の特色ある取組として挙げられるのが,「大学・研究機関等研修」である。本研修は，県教育委員会と県内大学・研究機関等との連携による研修であり，教職員の各教科等に関する専門性を高めることを目的としている。本研究では，平成26年度大学・研究機関等研修を受講した教職員を対象として，研修が終了して半年後の３月に受講者の意識・行動の変容，児童生徒の反応，研修の在り方等についてアンケート調査を実施した。

その結果,「博物館の資料を使用し，化石の観察を通して考える授業を展開した」,「部活動のウォーミングアップに取り入れた」等，学校現場における授業の活性化につながる成果が見られた反面，工夫・改善すべき課題もいくつか見出された。

キーワード：大学・研究機関等研修，活用，変容

Ⅰ　はじめに

当センターは，平成16年度の開所以来，大学・研究機関等研修を開講している。夏季休業期間に10年経験者研修の受講者が選択する講座として開講したが，10年経験者研修以外の教職員も，希望者は受講できることとしている。

研修場所は，県と連携している県内４大学をはじめ，研究機関等において実施しており，研修内容については，教科指導や生徒指導に関する講座，各大学・研究機関等の特色を生かした講座が開設されている。ただし，具体的な研修内容については，大学や研究機関等に一任している。

平成26年度は７月24日から８月25日までの期間に，鳴門教育大学，徳島大学工学部・総合科学部，徳島文理大学，四国大学，徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校，徳島県立博物館，阿南市科学センターにおいて合計19講座を実施した（資料）。

研修終了直後に行ったアンケートにおいて,「研修講座は，今後の教育実践に生かせるか」に対する回答を全講座において平均すると,「大いに生かせる」が61.2%,「概ね生かせる」が36.8%，合計は98.0%であり，いずれの研修内容についても，ほとんどの受講者が生かせると考えていたことが窺えた。しかし，学校現場において，実際にどのように活用され，どのような効果があったのかを検証しなければ，本研修の目的が達成されたとはいえない。

そこで，本研究では，平成26年度の本研修を受講した教職員に対して，アンケート調査を行い，研修終了から半年間で，研修の内容がどのように生かされたかを検証することにした。

Ⅱ　アンケートの結果から

１　アンケート調査の方法と内容

平成26年度の大学・研究機関等研修を受講した教職員を対象に，表１のとおり13の質問についてアンケート調査を実施した。

実施期間　平成27年２月から３月
対象者　　平成26年度大学・研究機関等研修受講者
調査人数　139名（延べ）
回答者数　120名（延べ）

表１　アンケート調査の質問項目

質問	内容
質問１	あなたの採用後の教職経験年数はどれですか。 ①　～10年　　②　11年～20年　　③　21年～30年　　④　31年～ ※講師，助教諭等の方は①を選択してください。
質問２	あなたが受講した研修講座は何ですか。
質問３	研修講座を受講後，学んだことを授業等においてどの程度活用しましたか。 ①　大いに活用した　　②　ある程度活用した ③　あまり活用しなかった　　④　活用しなかった ※①②と回答した場合は，質問４～８，10～13に御回答ください。 ※③④と回答した場合は，質問９～13に御回答ください。
質問４	※質問３で①②と回答した場合 どのように活用したか，具体的に書いてください。
質問５	活用したときの児童生徒の反応はどうでしたか。 ①　よかった　　②　どちらかといえばよかった ③　どちらかといえばよくなかった　　④　よくなかった
質問６	※質問５で①②と回答した場合 どのような反応が見られたか，具体的に書いてください。
質問７	※質問５で③④と回答した場合 その理由や原因について，具体的に書いてください。
質問８	研修講座を活用した後，あなた自身の行動はどのように変容しましたか。 ①　研修内容を生かし，新たな課題を見付けて取り組んでいる ②　研修内容を別の方法で活用しようとしている ③　取組の成果や課題について振り返っている ④　今のところ一度きりの活用にとどまっている
質問９	※質問３で③④と回答した場合 その理由や原因について，具体的に書いてください。
質問10	研修講座を受講後，学んだことを所属校の他の教職員にも周知するための取組を行いましたか。 ①　校内の研修会や授業研究会等の場で説明した ②　説明は行っていないが，資料等を配付した ③　その他の方法により周知した ④　周知するための取組を行っていない
質問11	※質問10で①②③と回答した場合 他の教職員の反応はどうでしたか，具体的に書いてください。

質問12	※質問10で④と回答した場合 その理由や原因について具体的に書いてください。
質問13	学校現場における授業の活性化につなげるには，本研修の在り方をどのように工夫・改善すればよいか，具体的に書いてください。

2　成果の分析，評価等

（１）教職経験年数について

本研修の受講者の教職経験年数についての集計結果を，表２に示す。

質問１　あなたの採用後の経験年数はどれですか。
①　～10年　　②　11～20年　　③　21～30年　　④　31年～
※講師・助教諭の方は，①を選択してください。

表２　受講者の教職経験年数

	①	②	③	④
回答数(人)	54	40	17	9
割合(%)	45.0	33.3	14.2	7.5

本研修の受講者の教職経験年数について，「①　～10年」「②　11～20年」が中心となっているのは，10年経験者研修の選択研修になっていることによる。

（２）受講した研修講座について

各研修講座における受講者数を，表３に示す。

表３　各研修講座における受講者数

No.	講座名	人数（人）
1	地形図の読み方と利用法	3
2	絵本とその読み聞かせで学力をつけ，いじめを防ぐ	29
3	言語活動の充実に着目した音楽授業の工夫	9
4	コオーディネーション運動と巧みな動きづくり	5
5	身近な調理や食物の科学実験・実習	2
6	国語科教材研究の方法と実際	14
7	初等幾何からわかること，そしてその先	1
8	国際理解教育入門	2
9	フィンランドの学校英語教育：成功の背景を探る	6
10	徳島県の地質と自然災害	3
11	英語教育における「物語」の活用例～教室英語から引き込む楽しい物語の世界へ～	3
12	コンピュータを利用した数学教材づくり	2
13	いじめ問題の心理学的理解と指導・援助	4
14	幼児の心理と教育方法	10
15	アベノミクスと日本経済・地域経済	3
16	楽しい書写・書道授業～教材への工夫～	6

17	徳島県農業の現状と園芸作物栽培等の実際	9
18	教員のための博物館の日in徳島～授業に役立つ！博物館活用入門～	24
19	太陽の表面，惑星や星座の観察並びにその動き	4

特に，「絵本とその読み聞かせで学力をつけ，いじめを防ぐ」と「教員のための博物館の日in徳島～授業に役立つ！博物館活用入門～」において，受講した人数が多かった。

これは，これらの講座が，演習を中心とした内容であり，また，特別活動等においても，広く使えるものであったためと考えられる。

（3）授業等における活用について

研修講座を受講後，学んだことを授業等においてどの程度活用したかについての集計結果を，表４に示す。

質問３　研修講座を受講後，学んだことを授業等においてどの程度活用しましたか。
①　大いに活用した　②　ある程度活用した
③　あまり活用しなかった　④　活用しなかった

表４　授業等における活用の程度

	①	②	③	④
回答数(人)	25	47	29	19
割合(%)	20.8	39.2	24.2	15.8

研修講座を受講後，学んだことを授業等においてどの程度活用したかについての質問に対して，「①　大いに活用した」「②　ある程度活用した」の合計は60.0%，「③　あまり活用しなかった」「④　活用しなかった」の合計は40.0%であった。

（4）活用したときの児童生徒の反応について

活用したときの児童生徒の反応についての集計結果を，表５に示す。

質問５　活用したときの児童生徒の反応はどうでしたか。
①　よかった　②　どちらかといえばよかった
③　どちらかといえばよくなかった　④　よくなかった

表５　活用したときの児童生徒の反応

	①	②	③	④
回答数(人)	38	33	0	1
割合(%)	52.8	45.8	0	1.4

活用したときの児童生徒の反応についての質問に対して，「①　よかった」「②　どちらかといえばよかった」の合計は98.6%に対し，「④　よくなかった」はわずかに1.4%であった。

（5）行動の変容について

研修講座を活用した後，受講者である教職員の行動がどのように変容したかについての集計結果を，表６に示す。

質問８　研修講座を活用した後，あなた自身の行動はどのように変容しましたか。
①　研修内容を生かし，新たな課題を見つけて取り組んでいる
②　研修内容を別の方法で活用しようとしている

③　取組の成果や課題について振り返っている
④　今のところ１度きりの活用にとどまっている

表６　研修講座を活用した後の受講者である教職員の行動の変容

	①	②	③	④
回答数(人)	25	32	13	2
割合(%)	34.7	44.4	18.1	2.8

研修講座を活用した後，教職員の行動がどのように変容したかという質問に対して，「①　研修内容を生かし，新たな課題を見つけて取り組んでいる」が34.7%，「②　研修内容を別の方法で活用している」が44.4%，「③ 取組の成果や課題について振り返っている」が18.1%，「④ 今のところ一度きりの活用にとどまっている」が2.8%であった。

（６）他の教職員への周知について

研修講座を受講後，学んだことを所属校の他の教職員にも周知するための取組を行ったかについての集計結果を，表７に示す。

質問10　研修講座を受講後，学んだことを所属校の他の教職員にも周知するための取組を行いましたか。
①　校内の研修会や授業研究会等の場で説明した
②　説明は行っていないが，資料等を配付した
③　その他の方法により周知した
④　周知するための取組を行っていない

表７　所属校の他の教職員への周知

	①	②	③	④
回答数(人)	11	15	44	50
割合(%)	9.2	12.5	36.7	41.6

研修講座を受講後，学んだことを所属校の他の教職員に周知するための取組を行ったかという質問に対して，「①　校内の研修会や授業研究会等の場で説明した」が9.2%，「②　説明は行っていないが，資料等を配付した」が12.5%，「③　その他の方法により周知した」が36.7%，「④　周知するための取組を行っていない」が41.6%であった。

Ⅲ　考察

１　今回のアンケート結果より

（１）授業等での活用について

質問３の結果から，学んだことをどの程度授業等で活用したかについては，「①　大いに活用した」，「②　ある程度活用した」の合計は，60.0%であった。

さらに，質問３で①②と回答した人に対して，質問４では，授業等において具体的にどのように活用したかについて質問し，その主な記述内容をまとめると以下のようになった。

【研修内容の活用状況】

・高等学校２学年地理Ｂの地図の活用と地域調査の単元において，地形図を使用し，等高線

の読み取りを行った。その際，研修で学んだ地形図の特徴を生徒に分かりやすく伝えられた。
・実際の教材研究の際，研修で教わった方法で行った。
・いじめの予防や，いじめの発見に努める手立てとして活用できた。
・実際にいじめの事例はなかったが，問題行動があったときに，どう対処すればよいかを他の先生方と話し合った。
・人文コースで，出前授業や貸し出しについて，具体的に教えていただいた。現在の担当学年では活用できなかったが，他学年の先生に紹介したところ，出前授業を実施したようだ。
・教えていただいたことを，そのまま生徒に授業で話した。
・講座で作った作品などを実際に児童に見せて書写の楽しさを伝えた。
・新聞の読み取りやソーシャルスキルトレーニング，国語科での読み取りなど，事実を探して読み取る学習に生かした。

これらの回答によると，受講者が自身の授業や教材研究において，受講の成果を活用している事例が見られ，研修で学んだことが授業力の向上や指導法の充実に役立っていることが分かる。このことから，本研修講座は，自らの授業力を向上させようという意欲に応える研修になっているといえる。また，生徒指導に関わる研修では，いじめ予防等における手立てとして活用している事例が見られた。校内研修会等の機会に，研修講座で学んだ内容を他の教職員に伝達したり，教科会等で伝達したりする事例も見られた。それを他の教員がさらに活用する事例もあった。

質問５では，研修で学んだことを授業で活用することによって，児童生徒にどのような反応があったかについて質問した。さらに質問５で「①　よかった」「②　どちらかといえばよかった」と回答した人に対して，質問６では，どのような反応が見られたかについて質問し，その主な記述内容をまとめると以下のようになった。

【児童生徒の良好な反応】
・作業を取り入れることで，興味・関心が増し，意欲的に取り組んだ。
・普段行っている運動に加えて行ったため，生徒も新鮮そうな感じで楽しそうであった。
・生徒が相互に交流して，意見を交換し合うときに，たくさんの意見を書き，授業が活性化した。
・授業の受け手の表情が生き生きとして，反応も好意的でよかったように感じた。
・学習を通して，地球が誕生してからの時間や生物の多様性などへの興味が高まった。

これらの回答から，教職員が，講師から学んだ専門分野の最新の知識や体験した実技を，授業で活用することによって，児童生徒に良い影響を与えていることが分かる。児童生徒にとっては，研修の成果を取り入れた新たな方法での授業により，新たな学びを発見し，学習に対する興味関心が高まり，学習意欲の向上につながったと考えられる。また，児童生徒の反応が良くなったことが，結果として授業の活性化につながったとの回答も見られた。このことは，本研修講座の受講が，授業の活性化につながることを示す一つの事例といえる。

一方，質問５で「③　どちらかといえばよくなかった」「④　よくなかった」と回答した人に対して，質問７では，その理由や原因について質問し，その主な記述内容をまとめると以下のようになった。

【児童生徒の反応がよくなかったと回答した理由・原因】
・現在は，担任を持っていないので授業では活用しなかったが，校内研修では教職員には伝達講習を行った。
・教科書で紹介されていないようなことだったため。

否定的な回答となったのは，前述のとおり，本研修は10年経験者研修の選択研修であるとともに，全ての教職員を対象とした希望研修でもあるため，その教科を担当していない教員も選択することができることから，場合によっては，すぐに活用できる状況にないことも考えられる。また，研修講座の内容によっては全ての内容が教科書に沿ったものではないため，このような回答が見られたと考えられる。

（２）授業等で活用しなかった理由について

質問３で，「③　あまり活用しなかった」「④　活用しなかった」と回答した人に対して，質問９では，その理由について質問し，その主な記述内容をまとめると以下のようになった。

【活用しなかった理由・原因】
・授業の中で活用する場面が十分取れなかった。
・講義内容は具体的であったが，自分自身が活用する余裕が持てなかった。
・活用するような事象が発生しなかったため。
・日々の教育課程を消化するのに精一杯だった。
・今年度は，見学させていただいた分野の授業を受け持っていなかったため，あまり活用する機会がなかったが，今後，対象の学年を受け持ったときには，活用させていただきたいと思った。

実際に授業で活用の場面がなかったり，日々の教育活動を行うのに精一杯で活用する余裕がなかったりするという記述が複数見られることから，できるだけ授業で活用しやすい内容にするよう講座の内容を工夫する等の対策が必要と考える。また，現在授業を担当していない場合や授業の進度との間にずれがあることが記述されているが，これらについては，将来的には研修の成果を活用する場面があることも考えられる。

（３）教職員の変容について

質問８の回答から，研修講座を活用した後，教職員の行動がどのように変容したかを見ると，研修講座を受けたことをきっかけに，新しい課題を見つけて積極的に取り組もうとしていたり，所属校の児童生徒の実態にあった別の方法を自ら見出して活用しようとしている等，具体的行動に結びついている場合が多かった。また，具体的行動に結びつくまでには至っていなくても，成果や課題を振り返ることで，内面的に変容が見られるものもあった。

全体としては，97.2％の教職員が研修を受けた前後で，行動に変容があったと回答しており，本研修講座を受講することにより，教職員自身が新たな学びを発見し，それをきっかけに学んだ成果を活用しようとする等の変容があったことが分かる。

このことから，本研修を受講した教職員においては，自ら学び続けようとする姿が見て取れる。日々，児童生徒に対して教育活動を行っている教職員として，自らの資質を高めようとする姿勢は，全ての教職員に期待されるものである。

（４）他の教職員への周知について

質問10から，大学・研究機関等研修の受講内容を他の教職員へ周知した割合は，58.4％であった。質問10で「①　校内の研修会や授業研究会等の場で説明した」「②　説明は行っていないが，資料等を配付した」「③　その他の方法により周知した」と回答した人に対して，質問11では，他の教職員の反応について質問し，その主な記述内容をまとめると以下のようになった。

【受講内容の周知の際の他の教職員の反応】

・これまでにこの講座を受けた先生は多くいて，会話が弾み，様々なとらえ方や意見を聞くことができた。
・他の教職員に研修内容を紹介したところ，興味をもって聞いてもらえた。
・関心をもってくれて，自分も試してみると言ってくれた先生もいた。
・教科会で共有し，今後の授業に生かせるという話になった。
・研修内容がきっかけで，いじめ問題についてどのように対処すれば良いのかという話し合いが深まった。
・紹介した出前授業を実施していた。社会科の学習に役立った。

本研修は，受講者本人の各教科等に関する専門性を高めることに加え，受講後に，所属校の他の教職員に校内研修会や教科会等で伝達して，成果を広げてもらうことも目的としている。アンケート結果から，受講内容を他の教職員へ周知することにより，実際に活用されたり，共通理解が深まったりしている事例が見られ，様々な波及効果があることが分かった。

一方，質問10で「④　周知するための取組を行っていない」と回答した人に対して，質問12では，その理由を記述してもらった。

【周知の取組を行わなかった理由・原因】

・時間をとることができなかったから。
・個人的な資質向上のために研修講座に参加したから。

特に，時間的な余裕がないとの回答が多く見られた。このことから，教職員が日々の校務で多忙であり，時間的な余裕がない様子が窺えた。

各校とも，それぞれ事情も異なり，校内研修会についてもすでに年間計画が組まれている中で，時間確保が困難であることが考えられるが，より多くの教職員が各所属校において，研修の成果を周知してくれることを期待したい。

２　講師へのアンケートより

講師を務めた大学・研究機関等の先生方が，受講生である教職員に，どのような力を身に付けて欲しかったかを明らかにすることを目的として，本研修の講師を対象に記述式のアンケート調査を実施した。ただし，研究の都合上，平成27年度の本研修の講師を対象に実施した。

質問１　今回の研修講座を通して，受講生（教員）にどのような力を身に付けて欲しかったか，お聞かせください。

【主な回答】

・子どもが環境を通して学ぶことの具体的な内容や，その学びを深めるために保育者がどのような意図をもって子どもに関わり，環境を設定していくかについて考察・省察する力を付けて欲しい。
・国語科における教材分析力，多様な解釈を予想する力。
・生徒の読む力，書く力が最近弱くなっているので，英語という言語の言葉ひとつひとつの持っている意味を理解しつつ，読むことのおもしろさを，例えば物語のおもしろさに結び付けて生徒の自立的な学習へのきっかけにできるような力を付けていただきたいという思いで講座を開きました。
・徳島県内や日本各地で発生した自然災害の被災事例を学ぶことで，今後起こるであろう自然災害から，生徒・児童を守る力を身に付けて欲しい。

講師の方からは，身に付けて欲しい力として，考察・省察する力，教材分析力，生徒の自立的な学習のきっかけにできるような力，自然災害から児童生徒を守る力等が挙げられていた。これらは，授業実践をはじめとする学校の様々な教育活動において活用できる力であるといえる。

質問２　今回の研修講座の成果は，受講生（教員）の今後の指導等にどのように活用して欲しいとお考えですが，お聞かせください。

【主な回答】

・話し合いの場面において，学習者の読みに柔軟に対応したり，発問や学習課題を考えたりする時の手がかりとして，活用してもらえればと思います。
・遠足や授業等で，博物館を一層活用してもらうことによって，授業等学習の充実につながり，児童生徒の実感を伴う理解の手助けになったらと考えています。また，児童生徒が徳島県の自然や歴史・文化を知り，郷土への誇りを持ってくれれば良いと思います。
・学説がどのような論理に基づいて構築されているのかという観点から，判例や歴史的資料を詳細に参照し，客観的な解釈論の在り方にこだわって講義をさせていただいた。主観的価値判断の児童生徒への押し付けという教育内容に陥ってしまうことがないよう，学説内容を正確に把握した上で，児童生徒の主体的思考を促すことができるような教育に努めていただきたい。
・それぞれの学校ごとに起こりうる自然災害の種類や危険性が異なる各学校ごとの防災体制の構築と実施に活用して欲しい。

講座によってそれぞれ特色があり，多様な回答がされていたが，講師の先生方は，研修講座で学んだことを実際に授業で生かして欲しいと考え，そのことをねらいとして開講されたことが分かった。

Ⅳ　研究の成果と今後の課題

１　成果

大学・研究機関等研修の成果としては，研修講座の成果を実際の授業で活用することによって，

受講者である教職員の授業力の向上につながることや，授業の活性化につながる事例が見られたことが挙げられる。また，研修に関係した教材研究を通して教材への理解がさらに深まり，授業方法の改善等につながったのではないかと考えられる。

研修講座の成果を活用した授業を受けた児童生徒にとっては，学習意欲の向上や興味・関心をもつことにつながっている事例が見られた。本研修の成果が児童生徒にもよい影響を与えていることが，本研究を通して明らかになった。

２　課題

課題としては，研修成果をさらに活用することや各所属校においてさらに周知を行うことが挙げられる。活用できなかった理由として，十分な時間が確保できなかったというものが多かった。日々の校務は忙しいが，活用できるものから少しずつ授業等に取り入れていけば，活用状況の改善につながると考える。

各所属校での校内研修会に取り入れるなどにより，研修成果を他の教職員へ周知することは，学校の教育活動の活性化につながるものであると考える。伝達講習会の形では実施できないとしても，研修講座で配付された資料の回覧や，学年会や教科会等のより小さい単位での周知も有効である。

３　改善策

質問13では，大学・研究機関等研修の改善点について質問を行った。その主な記述内容を以下に示す。

【改善に関する記述】

・開設される講座は，どれも興味深いものが多いです。もっと，広報をしていただくとよいと思います。
・研修内容についてもう少し広報があれば，受講者が増え，教員の専門性が高まるかもしれないと感じた。
・研修が実施される日時や研修内容を事前に周知することが必要だと考えます。
・教科書の内容で取り組める実践例を示していただけると活性化につながると思います。
・教員自身の学問に対する意欲，関心を高められるような講座を続けて開講してほしい。
・実際の授業で実施できるようなことをしてくれると有り難いです。
・講座を受けた者が，他の教員に伝えることがまず大切だと思う。
・研修の受講者が他の教職員に伝え，学校全体で活性化につなげないといけない。

以上の記述から，本研修の存在を広報することによって教職員に認知させることが必要であることが窺える。

現在取り組んでいる広報の方法として，平成26年度からは，前年度末に，講座名，実施日，講師名，講座の概要等を記した年間計画表を全教職員分印刷し，各学校に配付するようにし，次年度がスタートする４月にすみやかに教職員一人一人に配付してもらっている。

今後，広報の方法をさらに改善することにより，受講者の増加に努力したい。

Ⅴ　おわりに

徳島県教育振興計画（第２期）では，本県教育を担う教職員に，探究力や教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力，専門職として高度な知識・技能，さらには，豊かな人間性や社会性等の総

合的な人間力を求めている。また，中央教育審議会の「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」においても，これからの教員に求められる資質能力として，「教員が探究力を持ち，学び続ける存在であることが不可欠である（「学び続ける教員像」の確立）。」とされている。

本研究により，大学・研究機関等研修は，本県教育を担う教職員を支援し，学び続けようとする教職員を支援する有効な研修の一つであると考えられる。県と大学や研究機関等が連携することで実施している本研修講座は，教職員にとって，教科指導や生徒指導に関する理論的かつ学術的知見を得られたり，幅広く専門的な知識・技能の刷新を図ることができたりするなど，教職員の資質向上につながる非常に有意義な研修であると考えられる。今後とも，さらに多くの教職員が受講し，研修の成果を広めることにより，本研修がより充実したものとなるよう努めていきたい。

参考文献

・徳島県教育委員会「徳島県教育振興計画（第２期）」，2013年
・中央教育審議会「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」，2012年

資料

平成26年度大学・研究機関等研修実施一覧表

No.	講　座　名	大学・研究機関等
1	地形図の読み方と利用法	鳴門教育大学
2	絵本の読み聞かせで学力をつけ，いじめを防ぐ	
3	言語活動の充実に着目した音楽授業の工夫	
4	コオーディネーション運動と巧みな動きづくり	
5	身近な調理や食物の科学実験・実習	
6	国語科教材研究の方法と実際	
7	初等幾何からわかること，そしてその先	
8	国際理解教育入門	
9	フィンランドの学校英語教育：成功の背景を探る	
10	徳島県の地質と自然災害	徳島大学総合科学部
11	英語教育における「物語」の活用例～教室英語から引き込む楽しい物語の世界～	
12	コンピュータを利用した数学教材づくり	徳島大学工学部
13	いじめ問題の心理学的理解と指導・援助	徳島文理大学
14	幼児の心理と教育方法	
15	アベノミクスと日本経済・地域経済	四国大学
16	楽しい書写・書道授業～教材への工夫～	
17	徳島県農業の現状と園芸作物栽培等の実際	徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校
18	教員のための博物館の日in徳島～授業に役立つ！博物館入門～	徳島県立博物館
19	太陽の表面、惑星や星座の観察並びにその動き	阿南市科学センター

学力向上に向けた研修講座運営マニュアル

―研修講座の充実を図るために―

教職員研修課　井上 史朗　宮本 浩子　吉本 憲司　福田 幸司
横畠亜希子 上萩 琴美　亀田 佳子　大西 仁史

要　　旨

徳島県においては，平成26年度の全国学力・学習状況調査の結果を受け，県内の児童生徒の学力の向上を図ることが喫緊の課題となった。そこで，確かな学力の育成を図るため，県教育委員会が実施している研修講座を見直し，改善を図った。その中でも，若手の教職員を中心に実施する基本研修，ミドルリーダーを対象とした主幹教諭・指導教諭研修，校長・副校長・教頭を対象とした学校リーダー研修について，本年度実施したそれぞれの研修マニュアルを見直し，次年度への学力向上に向けた研修内容や研修方法の改善点をまとめた。

キーワード：学力向上に向けた取組，研修講座の充実，教職員研修の実施体系

Ⅰ　はじめに

平成26年度の全国学力・学習状況調査の結果から，さらに本県の児童生徒の学力向上を図ることが喫緊の課題となった。平成27年度は，県教育委員会において，これまでの取組を見直し，学力向上に向けた改善策や新たな取組等を検討し，さまざまな施策を実施してきた。その中で，総合教育センターにおいても，本センターを会場として実施される多くの研修講座の研修内容や実施方法などの見直しを行い，より充実した研修になるよう改善を図った。

Ⅱ　教職員研修の実施体系と研修の改善

本県では，教職員研修を実施するに当たり，教職員に求められる資質や能力を
①「専門職としての高度な知識・技能」
②「教職に対する責任感，自主的に学び続ける力」
③「総合的な人間力」
の３点ととらえている（図１）。そして，「徳島県教育振興計画（第２期）」の基本目標である「とくしまの教育力を結集し，未来を創造する，たくましい人づくり　～県民とともに考え，ともに育むオンリーワン教育の実現～」の実現に向けて，全教職員の資質や能力の向上を目指して，さまざまな研修を実施している。

その際，教職員のライフステージを「実践力養成期間」「実

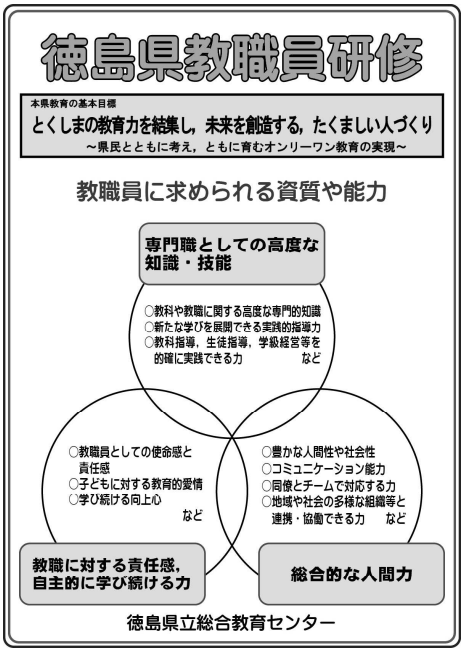


図１ 徳島県教職員研修リーフレット

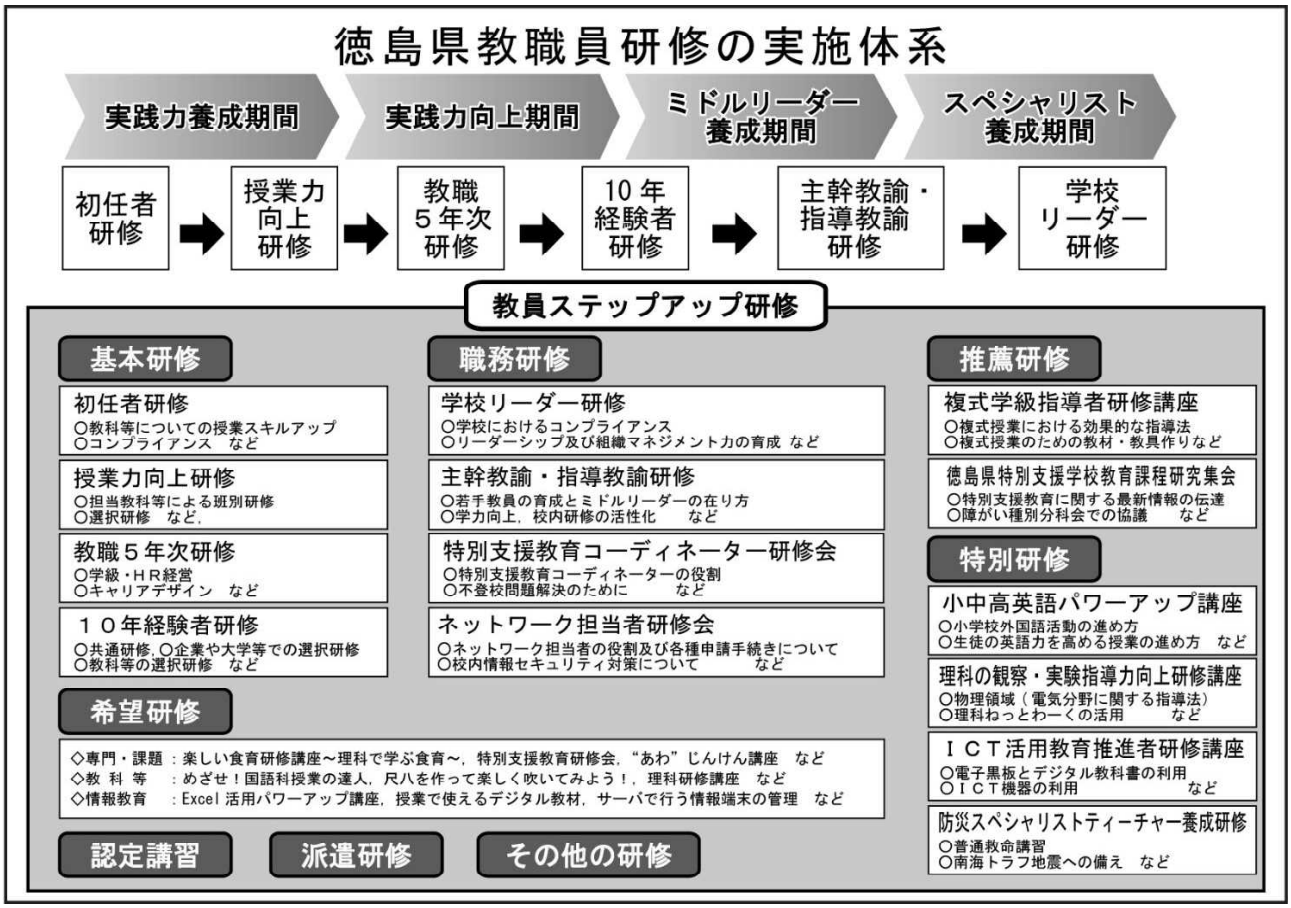


図２　徳島県教職員研修の実施体系概念図

践力向上期間」「ミドルリーダー養成期間」「スペシャリスト養成期間」の４つに分け，それぞれのライフステージに課題を設定し，その解決に向けて研修を計画している。そして，その研修内容を関連付けるように，系統的・計画的に実施していくようにしている。さらに，それぞれの教職員の経験年数や職務・職責，喫緊の教育課題等に対応できるよう，「教員ステップアップ」研修として基本研修・職務研修・推薦研修・特別研修・希望研修・派遣研修・認定講習・その他の研修と多様な研修講座を開設している（図２）。

本年度は，学力向上を図るために，各研修講座において改善を図ることとした。特に，教職員に採用されてからの10年間に実施する基本研修は，教職員の極めて重要な研修期間である。この時期において，教職員の授業力・指導力の基本が形成されると考えている。授業は確かな学力の育成において根幹をなすものであり，授業がきちんと成立しなければ学力向上にはつながらない。そこで，基本研修を教職員の授業力の向上につながる研修に改善することにより，児童生徒の学力向上を図ることができると考えた。また，教職員個人だけの力で児童生徒の学力向上を図ることは難しいため，学校全体で学力向上に向けた取組が必要となる。そのためには，学校運営において中核となるミドルリーダーや学校リーダーの果たす役割は大きい。そこで，主幹教諭・指導教諭研修や学校リーダー（校長・副校長・教頭）研修においても，学力向上に向けたマネジメント等の研修を取り入れることにより，学力向上に向けた組織的な取組となるよう研修の改善を行うこととした。

Ⅲ　各研修講座における学力向上に向けた取組と今後の研修について

１　初任者研修

（１）初任者研修のねらい

初任者研修は，新任教員に対して，教育公務員特例法第23条の規定に基づき，現職研修の一環として，１年間の研修を実施し，実践的指導力と使命感を養うとともに幅広い知見を得させることを目的とする。

（２）初任者研修の内容等

【校内研修】

○授業研修（90時間以上：週３時間程度）

・示範授業（20～30時間を目安に実施）
・実践授業（30時間を目安に実施）
・参観授業（全授業研修の１割程度，教科が異なることも可）
・研究協議（30～50時間を目安に実施）
・研究授業（年３回以上）

○一般研修（60時間以上：週２時間程度）

基礎的素養（服務，コンプライアンス等），学級・ホームルーム経営，教科等指導，道徳，特別活動，生徒指導，自立活動（特別支援学校）等

【校外研修】

○基礎的素養に関する研修
○学級・ホームルーム経営に関する研修
○教科等指導に関する研修
○生徒指導に関する研修
○体験に関する研修

（年間19日間）

（３）学力向上に向けた研修の取組について

【一般研修等における取組】

○学力向上研修

校種別に分かれ，各校種の教科等担当指導主事より，全国学力・学習状況調査等を基に，徳島県の学力に係る課題や徳島県が実施した学力向上に向けたステップアップテスト等の取組について講義を行っている。各校における学力向上に向けた取組や初任者自身の現在の取組について，グループで今後自分が取り組んでいくことについての意見交換や協議を行う中で，それぞれが所属校において取り組むことを明確にできるようにしている。

また，受講者が，全国学力・学習状況調査の問題を実際に解き，その内容を分析させることにより，教師が指導すべきポイントを確認させている。これから学力向上に向けて何に取り組むべきかを明確にした上で，同じ立場の教員同士の考えや指導方法についての協議を実施し，さらに具体的・実践的な取組が行えるようにしている。

【教科等研修における取組】

○授業スキルアップ研修Ⅰ

・校内指導教員（授業研修担当）との連携

教科等の指導については，校内研修において週３時間を設定し，校内指導教員がOJTで指導にあたり，校外研修では教科等担当指導主事により新年度開始後の５～６月にかけて

集中的に教科等の研修を行っている。しかし，各校の校内指導教員による指導と，本センター等の教科等担当指導主事の指導内容が十分に連携が取れていないと，その効果が望めない。

そこで，本センターでの教科等の研修が始まる前に，各校の校内指導教員（授業研修担当者）と各校種の教科等担当指導主事との事前打合わせを行っている。その中で，初任者に対する研修内容（学習指導要領の趣旨，学習指導案様式，評価規準の作成，言語活動の充実，授業の基礎・基本等）について確認を行っている。

・校種別による教科等担当指導主事の指導

小学校においては，全ての教科等について講義と演習を行っている。中学校・高等学校においては，専門教科について学習指導案を作成し，模擬授業や研究協議を行っている。また，専門教科におけるテスト問題作成上の配慮事項や評価の在り方等について指導している。特別支援学校においては，個別の支援計画の作成や個別の指導計画作成上の配慮事項や指導内容・指導方法等について，講義や協議を行っている。

○授業スキルアップ研修Ⅱ

各校種ごとに班別，教科別で決めた代表研究授業者の所属校において，班の初任者と管理職員，関係教員，教科等担当指導主事が参加して，研究授業・研究協議を行い，教科等に関する実践的指導力を身に付けさせている。

（４）初任者研修における課題と今後の研修の進め方等について

【初任者研修の課題】

初任者の授業力を向上させるための研修で行うべき研修内容は，年間指導計画や学習指導案の作成，評価規準についてなど多岐に渡る。そのため，事前打合わせ等で学校で行う校内研修と本センターでの研修内容との関連など確認をしているが，さらに研修の効果を上げるため，学校と本センターにおいて実施する研修内容について改善を図り充実させる必要がある。

【今後の研修の進め方等】

校内研修と校外研修の授業スキルアップ研修Ⅰの研修内容において，児童生徒に学習のねらいを理解させ，思考を広げたり深めたりするための発問の設定や児童生徒の反応についての予測など，授業に関する基礎・基本の指導の徹底を図る研修を行う。その際，初任者の授業における指導技術の向上を図るための共通資料として，「とくしま授業技術の基礎・基本」を用いるとともに，「初任者研修のしおり」を使うことにより，研修の効果を高めるようにする。

２　授業力向上研修

（１）授業力向上研修のねらい

授業力向上研修は，教職１年を終了した小・中・高・特別支援学校教諭及び養護教諭に対して「授業力」の向上を図ることを目的とする。

（２）授業力向上研修の内容等

【校内研修】

研究授業　２日（課題把握のための研究授業１日，課題解決の検証のための研究授業１日）

【校外研修】

○全体研修　１日
○班別研修　0.5日
○選択研修　１日
（年間2.5日間）

（３）学力向上に向けた研修の取組について

教師の授業力向上が，児童生徒の学力向上につながる。その授業力向上に向けた研修が，受講者にとって課題意識を明確にもち，主体的に学ぶ学力向上研修となるよう，次の４つの改善を図った。

○全体研修において，自身の課題を明確にもち授業改善を図る意義について伝える。

○班別研修を原則として９月以降に実施する。教科等担当指導主事は，前期の授業点検シート（図３）や実施報告書（図４）に書かれた課題を踏まえて指導する。

【様式５】

授業点検シート（提出用）

所属校名		受講者氏名	㊞

・日頃の自分の授業における指導スキルを振り返ってみてください。
・指導スキルの各項目について，自分に当てはまるのは４～１のどれでしょうか。
最も近いと思う番号に○を付けてください。

［ ４ とてもそう思う ３ そう思う ２ 少しそう思う １ そう思わない ］

指導スキル	項目	チェック	平均
発問・指示	① 分かりやすい発問・指示をしている。	４ ３ ２ １	
	② 児童生徒の発言内容を授業に生かしている。	４ ３ ２ １	
	③ 発問を精選し，工夫している。	４ ３ ２ １	
	④ 児童生徒が話を聞こうとする状態になってから，発問や指示をしている。	４ ３ ２ １	
板書・ＩＣＴ活用	① 正しい筆順で，誤字や脱字がなく板書ができており，文字の大きさや量も適切である。	４ ３ ２ １	
	② 学習や思考の流れが分かるよう板書の工夫をしている。	４ ３ ２ １	
	③ 色の使い分け，図や視覚的な教材・教具（写真・絵・パネルなど）を効果的に使用している。	４ ３ ２ １	
	④ ＩＣＴ機器を効果的に活用している。	４ ３ ２ １	
態度・説明	① 声の大きさや話す速さが適当である。	４ ３ ２ １	
	② 顔の表情や身振り手振りを工夫して話している。	４ ３ ２ １	
	③ 具体的な例や身近な話を交えて分かりやすく話している。	４ ３ ２ １	
	④ 児童生徒の表情やしぐさから，理解度を確認しながら話している。	４ ３ ２ １	
対応	① 授業を受けるときの基本的な習慣を身に付けさせ，適切な対応をしている。	４ ３ ２ １	
	② 児童生徒が誤答や失敗を恐れずのびのびと学ぶ雰囲気をつくっている。（児童生徒の発言の受け止め方）	４ ３ ２ １	
	③ 児童生徒の質問や要望に適切に対応している。	４ ３ ２ １	
	④ 一部の児童生徒に偏ることなく発表を求め，授業を進めている。	４ ３ ２ １	
評価・支援	① 授業のねらいを達成するための教材・教具の準備をしている。	４ ３ ２ １	
	② 本時のめあてを示したり振り返ったりする活動を計画的に取り入れている。	４ ３ ２ １	
	③ 授業中の児童生徒の学習状況を適切に把握している。	４ ３ ２ １	
	④ 児童生徒のつまずきに，適切に対応している。	４ ３ ２ １	
時間	① 授業の開始時刻と終了時刻を厳守している。	４ ３ ２ １	
	② 児童生徒の学習状況に応じた時間配分ができている。	４ ３ ２ １	
	③ 児童生徒が考える時間をきちんと確保している。	４ ３ ２ １	
	④ 児童生徒に質問や主体的な活動の時間をとっている。	４ ３ ２ １	

図３　授業点検シート

【様式３】

授業力向上研修実施報告書①

校種等	小・中・高・特・養（○で囲んでください）	受講番号（　）	所属校名 氏　名 ㊞
授業実践の記録（教材研究の力，授業技術の力，児童生徒理解の力について）			
教科（科目）等名		単元(題材)名	
学年・組		実施日時	月　日　時限（校時）
授業参観者			
授業実践上のポイント（取り組んだ課題）			
課題改善状況（授業研究会での指導助言内容を含む）			
自分の課題（次回の研究授業に向けての改善のテーマ，改善方法について）			
学校長氏名 ㊞			

図４　実施報告書

○班別研修では，事前の打合わせの時間を取り，授業者の課題をもとに授業観察の視点を明確にもつとともに，参会者自身の課題解決に向けての視点も明確にする。前期の授業点検シートや実施報告書を活用しながら課題解決につながる授業研究会となるようにする。

○初任者研修における成果を踏まえ，すべての教科等で学力向上を図っていこうとする意識が高まるよう，「とくしま授業技術の基礎・基本」を活用しながら，発問・板書・ノート指導・ICT活用についての指導スキルの向上に重点を置いた内容とする。

（４）授業力向上研修における課題と今後の研修の進め方等について

【授業力向上研修の課題】

○受講者の研修実施報告書の内容等から，自ら課題を見いだし，その課題解決に向けて取り組んでいる姿に個人差が見られた。チェックシートを日頃の授業においても繰り返し活用するよう働きかける必要がある。

【今後の研修の進め方等】

○授業力向上を目指した研修としての特徴を明確に意識し，研修に臨むことが求められる。受講者が自身の授業について課題意識を明確にもち，主体的・協働的に資質向上を図るアクティブ・ラーニングとなるよう，本年度改善した事柄を継続実践する中で充実を図る。担当者は，受講者がどのように課題解決に取り組んでいるかを提出された報告文書等から把握し，必要に応じ指導助言する。また，全体研修や「手引」を通して，「授業点検シート」を繰り返し活用すること，１年間の取組を年度末に振り返ることなどを指導する。

３　教職５年次研修

（１）教職５年次研修のねらい

教職４年を終了した教諭等が，広い視野からこれまでの教職経験を振り返り，それぞれの使命を自覚するとともに，教諭等に求められる資質および実践的指導力の向上を図ることを目的とする。

（２）教職５年次の内容等

【校内研修】

○研究授業と研究協議（管理職員参加）を１回以上実施する。

【校外研修】

○全体研修（コンプライアンス・生徒指導）　１日
○学級（ホームルーム・保健室）経営・情報教育研修　１日
○教科等指導研修　１日
（年間３日間）

（３）学力向上に向けた研修の取組について

○研究課題の設定と研究授業の実施

「分かる授業のための指導方法の工夫」，「評価と指導の一体化を図る」，「個に応じた指導の一層の充実を図る」等，受講者の実践的指導力向上に関するものを，研究課題として設定した上で研修に取り組んでいる。受講者全員が研究授業を実施し，研究授業後の管理職員を含む研究協議参加者からの意見・助言も踏まえて，その成果を自己確認している。

○研究授業についての協議

受講者全員が実施した研究授業について，その授業の学習指導案を基に，校種別教科別に教科等指導研修を実施している。それぞれの校種で，同じ教科の受講者と教科等担当指導主事が参加し，取り組んだ研究授業について協議を行う。その中で，教科等担当指導主事が，教科等に関する細かな学習内容や，具体的な授業改善等について指導助言を行っている。

（４）教職５年次研修における課題と今後の研修の進め方等について

【教職５年次研修の課題】

○受講者は，所属校においてそれぞれの授業力向上のための課題を設定し，その解決に向けた授業改善を行い，研究授業・授業研究会を実施している。しかし，教科等指導研修における授業研究会で協議をする場合，他の受講者にとっては，初めて聞く授業内容となるため，協議内容が十分に焦点化されなかったり，効果的でなかったりする場合がある。

○教職５年次研修を終了した教諭等が，今後も初心を忘れず，自分の授業力向上に向けて研鑽に努めるため，一人一人が次の10年経験者研修に向けて，自分の授業力向上にどのように取り組んでいくのか考える必要がある。

【今後の研修の進め方等】

○受講者と教科等担当指導主事が協議を行う際に，各受講者が実施した研究授業の学習指導案と，研究課題や協議内容についてまとめた研究授業実施報告書を協議資料とする。研究授業実施報告書に書かれた研究課題を協議の柱とすることで，より具体的な協議が行われるようにし，教科等担当指導主事による指導助言も，受講者にとってより実践的・効果的なものとなるようにする。

○キャリアデザインについての講座を行い「学び続けていこうとする姿勢」について考えさせ，今後も授業力向上に向けて取り組み，10年経験者研修へとつなげるようにする。そのために，初任者研修時に作成した「教職５年次研修に向けて」を基にこれまでの自分の取組などを振り返り，10年経験者研修に向けての授業力向上を図るための課題とその実現に向けた研修・研究についてまとめ，提出するようにする。

４　10年経験者研修

（１）10年経験者研修のねらい

10年経験者研修は，教育公務員特例法第24条の規定に基づき，個々の能力，適正等に応じて，教諭等としての資質の向上を図ることを目的とする。

（２）10年経験者研修の内容等

【休業期間中研修】（小・中・高・特別支援学校教員の場合）

○共通研修（３日間，うち１日は現地実習「人権教育」）
○教科指導等研修（２日間以上，うち１日は「ICTを活用した模擬授業研修」）
○生徒指導等研修（２日間以上）
○その他の領域の研修（１日間以上）

10日間

【課業期間中研修】（小・中・高・特別支援学校教員の場合）

○データ入力による自己評価表の作成及び研修計画の立案（１日間）
○教科等の指導に関する研修（９日間）
○特定課題（学校活性化プラン）研究（10日間）

20日間

（３）学力向上に向けた研修の取組について

【「ICTを活用した模擬授業研修」における取組】

教科等担当指導主事が事前に指導案に目を通して，学力向上に資するICTを効果的に生かした授業展開になるように指導し，模擬授業を行っている。その際に，どのようなICT機器を，何のために，どのような場面で，どのように利用するかを，受講者の指導案を基に検討している。また，プレゼンテーション資料等を作成する場合は，指導案とともに教科等担当指導主事に送付し，プレゼンテーション資料等の内容についても指導している。

【教科等の指導に関する研修における取組】

各学校の課業期間中に，１ユニット３日間の３ユニットで実施している。校長，副校長及び教頭等は教材研究及び学習指導案作成において，適宜，指導・助言を行うとともに，研究授業を観察・評価し，指導・助言を行っている。そのうちの１ユニットは休業期間中研修で行った「ICTを活用した模擬授業研修」で作成した学習指導案で研究授業を行い，教科等担当指導主事の指導が授業に生かされているかを協議している。

（４）10年経験者研修における課題と今後の研修の進め方等について

【10年経験者研修の課題】

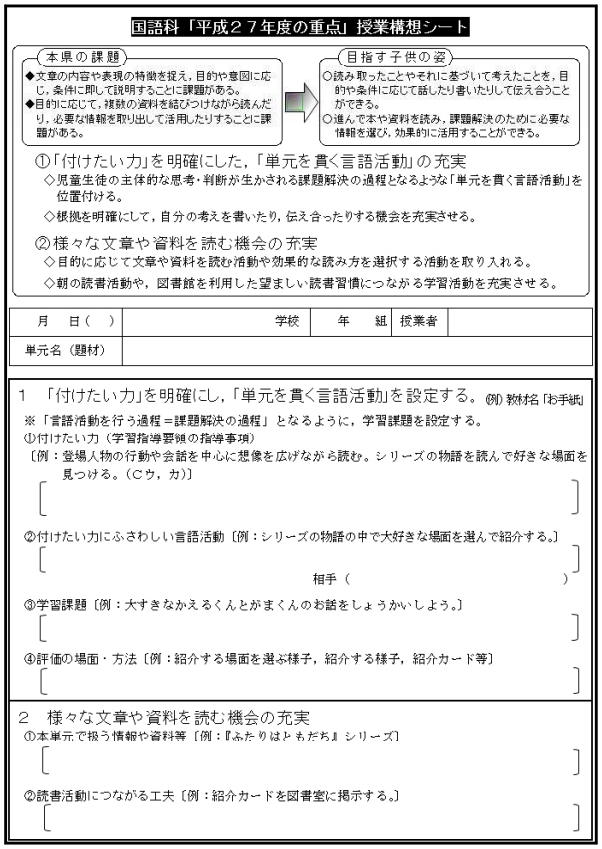
○「ICTを活用した模擬授業研修」では，10日前に教科等担当指導主事へ学習指導案やプレゼンテーション資料等を送り，事前指導を行っている。教科等担当指導主事は，「ICTを活用した模擬授業研修」のねらいや意義を十分把握して，事前指導をしっかり行い，充実した模擬授業となるようにしなければならない。また，教科等担当指導主事は，ミドルリーダーとしての授業技術，ICTを活用した授業の有効な流れ等を指導する必要がある。

○課業期間中研修における教科等の指導に関する研修については，専門教科と道徳又は特別活動について教材研究等と研究授業・研究協議を３回（３ユニット）行う。そのうちの１回は，夏季休業期間中に教科等担当指導主事の指導を受けて「ICTを活用した模擬授業研修」を行い，校内で研究授業・研究協議を実施している。他の２回は，校内において管理職員の指導を受け研究授業・研究協議を実施しているが，校内における研修では，教科等担当指導主事がいないため,研究協議では受講者の研究内容について焦点化するなどの工夫が必要である。

【今後の研修の進め方等】

○10年経験者研修担当と教科等担当指導主事との連絡を密にし，ミドルリーダーとしての「ICTを活用した模擬授業研修」のねらいや意義を共有する。また，「10年経験者研修における模擬授業研修の手引」の中でICTを活用した授業の指導のポイントを明記して，すべての教科で指導の重点の共有化と効率的な指導が行えるようにする。

○研究授業づくりや研究授業後の研究協議等において，「授業構想シート」（図５）や「授業改善シート」（図６）を適宜活用していく。例えば，「ICTを活用した模擬授業研修」では，



国語科「平成２７年度の重点」授業構想シート

本県の課題
◆文章の内容や表現の特徴を捉え，目的や意図に応じ，条件に即して説明することに課題がある。
◆目的に応じて，複数の資料を結びつけながら読んだり，必要な情報を取り出して活用したりすることに課題がある。

目指す子供の姿
○読み取ったことやそれに基づいて考えたことを，目的や条件に応じて話したり書いたりして伝え合うことができる。
○進んで本や資料を読み，課題解決のために必要な情報を選び，効果的に活用することができる。

①「付けたい力」を明確にした，「単元を貫く言語活動」の充実
◇児童生徒の主体的な思考・判断が生かされる課題解決の過程となるような「単元を貫く言語活動」を位置付ける。
◇根拠を明確にして，自分の考えを書いたり，伝え合ったりする機会を充実させる。

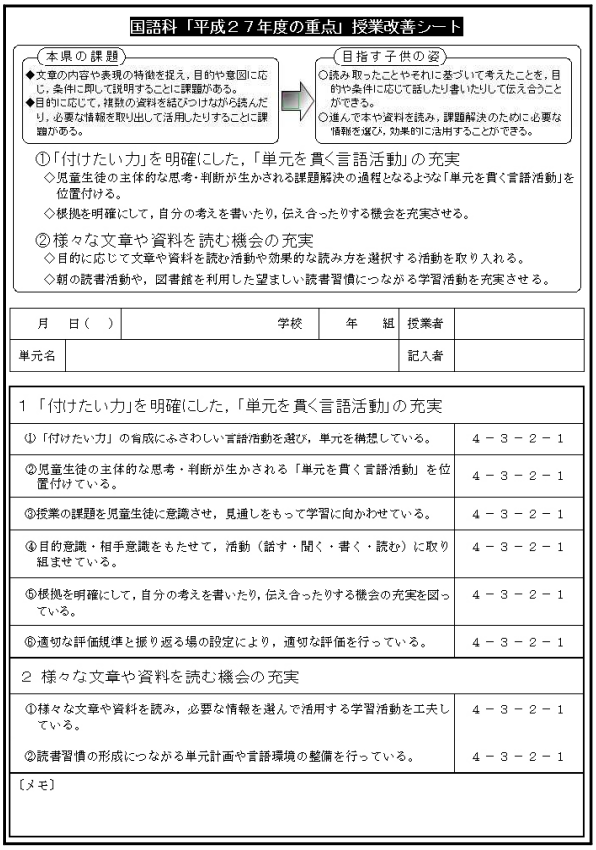
②様々な文章や資料を読む機会の充実
◇目的に応じて文章や資料を読む活動や効果的な読み方を選択する活動を取り入れる。
◇朝の読書活動や，図書館を利用した望ましい読書習慣につながる学習活動を充実させる。

月　日（　）	学校	年　組	授業者	
単元名（題材）				

1　「付けたい力」を明確にし，「単元を貫く言語活動」を設定する。（例）教材名「お手紙」
※「言語活動を行う過程＝課題解決の過程」となるように，学習課題を設定する。
①付けたい力（学習指導要領の指導事項）
〔例：登場人物の行動や会話を中心に想像を広げながら読む。シリーズの物語を読んで好きな場面を見つける。（Cウ，カ）〕
［　　］
②付けたい力にふさわしい言語活動〔例：シリーズの物語の中で大好きな場面を選んで紹介する。〕
［　　相手（　　）］
③学習課題〔例：大すきなかえるくんとがまくんのお話をしょうかいしよう。〕
［　　］
④評価の場面・方法〔例：紹介する場面を選ぶ様子，紹介する様子，紹介カード等〕
［　　］

2　様々な文章や資料を読む機会の充実
①本単元で扱う情報や資料等〔例：『ふたりはともだち』シリーズ〕
［　　］
②読書活動につながる工夫〔例：紹介カードを図書室に掲示する。〕
［　　］

図５　授業構想シート



国語科「平成２７年度の重点」授業改善シート

本県の課題
◆文章の内容や表現の特徴を捉え，目的や意図に応じ，条件に即して説明することに課題がある。
◆目的に応じて，複数の資料を結びつけながら読んだり，必要な情報を取り出して活用したりすることに課題がある。

目指す子供の姿
○読み取ったことやそれに基づいて考えたことを，目的や条件に応じて話したり書いたりして伝え合うことができる。
○進んで本や資料を読み，課題解決のために必要な情報を選び，効果的に活用することができる。

①「付けたい力」を明確にした，「単元を貫く言語活動」の充実
◇児童生徒の主体的な思考・判断が生かされる課題解決の過程となるような「単元を貫く言語活動」を位置付ける。
◇根拠を明確にして，自分の考えを書いたり，伝え合ったりする機会を充実させる。

②様々な文章や資料を読む機会の充実
◇目的に応じて文章や資料を読む活動や効果的な読み方を選択する活動を取り入れる。
◇朝の読書活動や，図書館を利用した望ましい読書習慣につながる学習活動を充実させる。

月　日（　）	学校	年　組	授業者	
単元名			記入者	

1「付けたい力」を明確にした，「単元を貫く言語活動」の充実	
①「付けたい力」の育成にふさわしい言語活動を選び，単元を構想している。	4－3－2－1
②児童生徒の主体的な思考・判断が生かされる「単元を貫く言語活動」を位置付けている。	4－3－2－1
③授業の課題を児童生徒に意識させ，見通しをもって学習に向かわせている。	4－3－2－1
④目的意識・相手意識をもたせて，活動（話す・聞く・書く・読む）に取り組ませている。	4－3－2－1
⑤根拠を明確にして，自分の考えを書いたり，伝え合ったりする機会の充実を図っている。	4－3－2－1
⑥適切な評価規準と振り返る場の設定により，適切な評価を行っている。	4－3－2－1
2　様々な文章や資料を読む機会の充実	
①様々な文章や資料を読み，必要な情報を選んで活用する学習活動を工夫している。	4－3－2－1
②読書習慣の形成につながる単元計画や言語環境の整備を行っている。	4－3－2－1
〔メモ〕	

図６　授業改善シート

教科等担当指導主事が事前指導時に「授業構想シート」に沿って授業のねらいを明確化できているか，学習指導の具体的な構想を練ることができているか，指導する。また，研究協議では，「授業構想シート」を用いて研究内容について受講者同士の共有化を図り，さらに「授業改善シート」を用いて，評価を行い，今後の授業の改善につなげる工夫を行う。

５　主幹教諭・指導教諭研修

（１）主幹教諭・指導教諭研修のねらい

①　主幹教諭研修

小学校・中学校・高等学校及び特別支援学校の主幹教諭に対して，指導力及び組織マネジメント能力等を高め，各学校における教育力の向上や組織の活性化を図ることを目的とする。

②　指導教諭研修

小学校・中学校・高等学校及び特別支援学校の指導教諭に対して，授業力及び指導力等を高め，各学校における教育力の向上や組織の活性化を図ることを目的とする。

（２）主幹教諭・指導教諭研修の内容等

任用１年目（３日間），任用２年目以降（４月と12月の午後２日間）

○第１回　４月６日（月）　場所：鳴門教育大学

主幹教諭・指導教諭

・午前　講義「職務について」，「学校におけるコンプライアンス」

・午後　講義「学校組織マネジメントと協働体制の確立」，「学校分析の観点と方法」

○第２回　８月19日（水）　場所：鳴門教育大学

主幹教諭

・午前　講義「職場でのコーチングの充実」，「カリキュラムの充実」

・午後　ラウンドテーブル「学校の課題分析と改善計画」

指導教諭

・午前　講義「職場でのコーチングの充実」，「校内研修の活性化」

・午後　ラウンドテーブル「学校の課題分析と改善計画」

○第３回　12月25日（金）　場所：徳島県立総合教育センター

主幹教諭

・午前　講義「地域連携の構築」，「危機管理体制の充実」

・午後　ラウンドテーブル「各学校の取組の検証」

指導教諭

・午前　講義「授業研究の高度化」，「ICT活用指導力の向上と情報モラルの推進」

・午後　ラウンドテーブル「各校の取組の検証」

（３）学力向上に向けた研修の取組について

平成27年度より鳴門教育大学と連携して３日間の研修を実施する。受講者は各学校の課題を明確にしたうえで，次のようなテーマ（図７）を選択し，その課題の解決に向けて取り組み，実践内容について報告する。任用１年目の教諭は８月と11月に作成中の実践報告書を提出し，大学の教員にその内容について添削を受ける。そして，８月と12月の研修会では修正した実践報告書を持ち寄り，大学の教員を交えてそれぞれのテーマごとにラウンドテーブルによる協議を行い，取組の検証を行う。任用２年目以降の教諭は12月のラウンドテーブルにのみ参加する。

主幹教諭研修	指導教諭研修
A 学校組織マネジメントと協働体制の確立 B 危機管理体制の充実 C 職場でのコーチングの充実 D カリキュラムの充実 E 地域連携の充実	F 職場でのコーチングの充実 G 授業の高度化 H 校内研修の活性化 I ICT活用指導力の向上と情報モラルの推進

図７　提示したテーマ

受講者の多くが実践報告書の中で，解決すべき課題として学力向上に関する課題を挙げており，個に応じた課題の工夫や学習支援体制の構築，また，授業改善に向けた研究などが実践されている。

大学教員による実践報告書の添削では，課題解決方法の具体化が図られ，ラウンドテーブルによる協議では，自校の実践を発表したり他校の実践を聞いたりすることで，悩みや課題解決に対する取組方法を共有する。

（４）学力向上の視点からの主幹教諭・指導教諭研修における課題と今後の研修の進め方等について

【主幹教諭・指導教諭研修の課題】

○任用１年目の主幹教諭・指導教諭に対して，自校の課題把握を的確に行い，ミドルリーダーの視点に立った課題設定及び課題解決がスムーズになされるよう，自主研究の進め方について十分説明する必要がある。特に，本県の重要課題の一つである学力向上の視点からのアプローチは重視すべきである。

○Ａ～Ｉのテーマは，直接又は間接的に学力向上に関わるテーマであり，どのテーマにおいても，学力向上に関する取組が発表されていた。学力向上に向けた各校の取組をもっと広く情報交換できるよう，持ち寄った実践報告書の交換方法やシェアリングの方法について工夫する必要がある。

【今後の研修の進め方等】

○平成27年度の３回分の研修アンケートを集計し，１年間の研修で実践してきたことが，自校の学力向上に，どのような効果があったと感じているかについてデータ分析を行い，改善につなげていく。

○12月のラウンドテーブルについて，昨年度の話し合いと比較することで改善の効能を測り，学力向上の視点からも明確に焦点化された話し合いができるよう，さらに改善方法を検討していく。

○任用１年目の主幹教諭・指導教諭が，自校の課題把握を的確に行い，ミドルリーダーの視点に立った課題設定及び課題解決ができるよう，第１回目の研修で行う自主研究の進め方の説明をさらに工夫するとともに，前年度の優れた取組について受講者が発表する。

６　学校リーダー研修

（１）学校リーダー研修のねらい

小・中・高等学校及び特別支援学校の校長，副校長，教頭を対象にリーダー研修を実施し，

管理職としての職務の自覚，識見及び指導力を高めることで，学校経営を推進する力を養う。

（２）学校リーダー研修の内容等

【校長研修】

①　新任校長等研修（小・中・高・特別支援学校合同）

○実施日数：５月中旬（１日）

○内　　容：講話「新任校長への期待」
講義「学校経営と学力向上」（小・中学校）
講義「学校経営と教育予算」（高・特別支援学校）
講義・演習「校長のリーダーシップと組織マネジメント」

②　校長研修（小・中学校，高・特別支援学校別）

○実施日数：４月中旬（高・特別支援学校），５月下旬（小・中学校）（0.5日）

○内　　容：講義「コンプライアンス」／「人権教育」（隔年）
講義「学校経営」

【副校長・教頭研修】

①　新任教頭等研修（小・中・高・特別支援学校合同）

○実施日数：５月上旬～中旬（１日）

○内　　容：講話「新任教頭等に期待すること」
講義「学校経営と学力向上」（小・中学校）
講義「学校経営と教育予算」（高・特別支援学校）
講義「教育現場におけるメンタルヘルス対策」
講義「教頭の職務」
講義・演習「教頭の実務」

②　副校長・教頭研修（小・中学校，高・特別支援学校別）

○実施日数：５月下旬～６月上旬（１日）

○内　　容：講義「人権教育」
講義「コンプライアンス」
講義・演習「学校組織マネジメント」（小・中学校），

（３）学力向上に向けた研修の取組について

「徳島県教育振興計画（第２期）」“阿波っ子みらい教育プラン”による，未来を担う子供たちに真の生きる力を育成するという目標達成に向けた取組，平成27年度からスタートした児童・生徒の学力向上のための「徳島『確かな学力』育成プロジェクト」に沿った授業改善や家庭学習の充実等，学校の果たすべき役割は多岐にわたる。このような状況を踏まえ，学校管理職の職務遂行と学校運営に役立つ研修を提供するため，講師の選定を慎重に行い，また，新任教頭等研修における実務研修では，校内研修の充実を図るための演習を実施している。

（４）学校リーダー研修における課題と今後の研修の進め方等について

【学校リーダー研修の課題】

○研修の系統性

学校リーダー研修の「学力向上」における役割を明確にし，特に主幹教諭・指導教諭研修との接続部分に当たる新任教頭等研修の内容及び持ち方についての見直しが必要である。

【今後の研修の進め方等】

○講師選定について

・学力向上におけるリーダーシップという視点から，次期学習指導要領を見越した研修内容の提供にふさわしい講師を選定する。

・主幹教諭・指導教諭研修との接続も含め，講義内容に偏りがなく，かつ講師と受講者のインタラクションや受講者同士での学びを大切にする講師を選定する。

Ⅴ　おわりに

教職員の資質・能力の向上を図り，一人一人教職員の授業力や指導力を付けていくことが，各教科等の授業の質を高めるとともに学校全体の教育の質を高めることににつながる。そうすることにより，一人一人の児童生徒に対する教育の質を高め，学力の向上につながると考えている。そのために，総合教育センターでは，実施される全ての研修講座に対して，これまで実施してきた研修内容や研修方法等について検証し，学力向上を図るための視点からより実践的なかつ効果的な研修講座となるよう改善を図っているところである。

平成26年11月には次期学習指導要領の改訂に向けて「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」の諮問が出された。その中で，「学習・指導方法の在り方（アクティブ・ラーニング）や評価方法の在り方」や「各学校におけるカリキュラム・マネジメントや，学習・指導方法及び評価方法の改善支援の方策」が審議事項の柱となっている。今後，次期学習指導要領に応じた研修の開講についても積極的に取り組んでいきたい。

参考文献

・文部科学省：教育課程企画特別部会「論点整理」関係資料

行動の偏りを伴う不登校児童生徒への教育相談の在り方（中間報告）

―発達障がいの特性を踏まえた相談対応の手引きの開発―

特別支援・相談課
平山 隆恵　板東 郁美　村部 穣
猪子秀太郎 福﨑 久美　大岸 雪子　廣島 慎一　中山 登

要　　旨

発達障がいのある不登校の児童生徒に対しては，一般的な不登校と異なる支援の必要性が指摘されている。そこで，既存のチェックシートを用いて，不登校児童生徒が示しやすい行動の偏りを明らかにし，偏りに応じた支援のための手引きを作成した。今後は，その手引きを相談業務で活用しながら，学校で不登校傾向を示す児童生徒に対して，教員がその行動特徴の把握と個別の対応や方法の策定ができるツールの作成を目指したい。

キーワード：不登校，発達障がい，行動の偏り，チェックシート，手引き，特別支援教育

Ⅰ　はじめに

「平成26年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査（文部科学省，2015)」によると県内における不登校児童生徒数は，小学校（127人）・中学校（499人）・高等学校（166人）であり，前年度との比較においては中学校は減少傾向にあるが，小学校，高等学校は増加している。また，総合教育センターへの相談件数は増加しており，平成26年度については各校種とも不登校の件数が全ての相談の中で最も多い。また，主訴としては不登校であるが，背景に発達障がいが関係していると思われるケースが増加していると考えられる。しかし，本人も周囲の者も障がい特性に気づかず，結果，二次障がいとして不登校や抑うつ等の心理的な症状が現れてから相談に来る場合もあり，問題の長期化に繋がることが懸念される状況にある。

「不登校問題に関する調査研究協力者会議（文部科学省，2003)」では，不登校の新たな原因として発達障がいがあることが指摘されている。発達障がいが原因で人間関係や学習につまずき，不登校に至っている事例も少なくないとある。学習障害（LD)，注意欠陥多動性障害（ADHD)，高機能自閉症等，学習や生活の面で特別な教育的支援を必要とする児童生徒数について，文部科学省が平成24年に実施した「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」の結果では，知的発達に遅れはないものの担任教員が学習面や行動面で著しい困難を示すと判断した児童生徒の割合は約6.5％であった。このことから学校や家庭等においては，児童生徒の発達特性の早期発見や適切な対応の必要性が認められた。そこで当課の相談業務においても不登校と発達障がいの関連性を踏まえた，より適切な相談活動を実施することが重要であると考える。

また，種々の先行研究においては，発達障がいの特性を伴う不登校児童生徒の支援について，一般的な不登校とは異なる支援の必要性が指摘されている。発達障がいの特性を伴う児童生徒の場合は，その特性により個別のオーダーメイド的な対応が求められると思われる。しかし，従来

は教員の持つ技術や感性で一般的な不登校対応を行う場合が多いと考えられる。そのことから，発達障がいを伴う不登校児童生徒の対応については，特別支援教育の視点を取り入れた有効な支援の在り方についての検討が必要である。

Ⅱ　研究の目的

平成27年度の研究においては，不登校児童生徒に対して効果的な支援を行うための方策として，徳島県立総合教育センター（2006）が作成した「通常の学級に在籍している特別な支援を必要とする子どものチェックシート（以下，「つまずきチェックシート」と記す）（資料１）」を利用し，不登校児童生徒と発達障がいの関連性とその実態を把握する。その後，その行動特徴に応じた手立てを試作し，それらを基として，教育相談において行動の偏りがわかるようなチェックリスト等，偏りに応じた支援のための手引きを作成する。

Ⅲ　研究計画

１　平成27年度研究

（１）不登校と発達障がいの関連性に関する先行文献の研究
（２）「つまずきチェックシート」を用いた実態把握の試行
（３）特別支援教育の指導方法を導入した対応の手引き試作

２　平成28年度研究

（１）相談対応の手引き（仮）作成
（２）教育相談業務における相談対応の手引き（仮）の試行
（３）相談対応の手引き（仮）の改善
（４）相談対応の手引き（仮）を活用した研修教材の開発

Ⅳ　研究内容

１　不登校と発達障がいの関連性に関する先行文献の研究

（１）目的

発達障がいと不登校児童生徒の関連性に関する先行文献を検討するとともに，発達障がいの特性を踏まえた不登校児童生徒のチェックリストや対応マニュアルの有無を確認する。

（２）方法

不登校及び特別支援教育に関連する学術雑誌の投稿論文，各都道府県，政令都市及び市町村等の教育センターにおける資料等を総覧し，不登校と発達障がいの関連性とその対応方法，チェックリストや対応マニュアルの有無といった観点で記述を整理，検討した。

（３）結果と考察

さまざまな先行研究において発達障がいと不登校の関連性が指摘されている。加茂・東條（2009）の茨城県における調査では，不登校（登校しぶりを含む）生徒218人中，発達障がいに関連すると思われる生徒が57人（26%）であった。また，中野（2008）が行った発達障がいが疑われる不登校児童生徒の実態調査では，不登校児童生徒（小学生130人，中学生505人，高校生128人）のうち発達障がいが疑われる者の割合は，小学生21人（16.1%），中学生40人（7.9%），高校生17人（13.3%）という結果であった。

障がい種との関連性について，栗田（1998）は典型的な広汎性発達障がい（PDD）よりも発

達水準の高いPDDの方が不登校のリスクが高いと述べている。また，中野（2008）は学習障がい（LD）より注意欠陥多動性障がい(ADHD）の方が不登校との関連性が見られると述べている。

診断の状況については，加茂・東條（2009）によれば，不登校状態となる前に発達障がいの診断があった事例は1.4%，発達障がいの診断のない事例が24.8%であった。武井ら（2009）の報告では不登校となった高機能広汎性発達障がい47例のうち，不登校を主訴に受診して初めて高機能広汎性発達障がいと診断された事例が93.6%であったという。

発達障がいのある児童生徒が不登校になるリスクは，その他の児童生徒に比べ高い傾向にある(愛知県総合教育センター 2013)。中野（2008）は，発達障がいのある児童は他者との感情を共有することが難しいために親しい関係を作ることが困難であること，いじめの対象になりやすく外傷性記憶として長くとどまること，これら自己評価の低下により不登校に至らしめると述べている。高機能であればそれだけ発見も保護者の受容も遅れ，かえって二次障がいとしての不登校が発現しやすく，強迫性が強ければ長期化するリスクがあるとも述べている。また，小野（2012）は軽度の症状の児童生徒が適切な診断が実施されなかったために，対象の特性にそぐわない環境と教育にさらされて不登校となった事例が想定されるとしている。

中野（2008）は，不登校が発達障がいの二次障がいだと分かれば見通しのない見守りは不適切な対応であると述べている。愛知県総合教育センター（2013）においても，「待つこと」や「受容」などの支援策が一般的な不登校の場合と比較して有効でなく，一般的な不登校と異なる支援の必要が指摘されている。

また,一般的な不登校に関するチェックシートは先行研究において数多く開発されているが，発達障がいの特性との関連性が明確に示され，その特性に伴う行動の偏りへの対応を明らかにしたものについては見つけることができなかった。

これらの結果から，発達障がいの特性を伴う不登校児童生徒の早期発見と適切な支援を行うために，発達障がいの行動特徴に対応した不登校に関するチェックリストや特別支援教育の知見を踏まえた手立て集の開発が必要であることが分かった。

２　「つまずきチェックシート」を用いた実態把握の試行

（１）目的

過去の不登校相談事例について，「つまずきチェックシート」による実態把握の効果，チェックシートの改善点，不登校生徒に多く見られる発達障がいの行動特徴を明らかにする。

（２）方法

総合教育センター特別支援・相談課教育相談担当の指導主事３名が，過去の相談事例の中で発達障がいの特性があると思われる事例について「つまずきチェックシート」を用い遡及的なチェックを行った。対象の児童生徒は小学校８名，中学校７名，高等学校３名，計18名であった。シートは，９領域について75項目から構成されている（資料１）。シートの各領域，項目のチェック件数を計数し，件数の多い項目を整理した。

（３）結果と考察

図１に過去の相談事例における「つまずきチェックシート」の各領域のチェック件数を示した。また，１項目あたりのチェック数が４件以上と多かった４領域の20項目を表１に示した。過去の不登校事例においては，対人関係領域においてチェック件数が多く，「聞く」「話す」「不

注意」等の項目もチェックされた。

一方，「読む」「書く」領域についてはチェックがなかった。

「友人と仲良くしたいと思っても友人関係を上手く築けない」や「不注意」の項目はチェック数が多かった。不登校の背景には，場に合わない発言をしたり，すぐ手が出てしまったりして，対人関係を上手く築くことが苦手な子どもや，興味の対象が狭くこだわりの強い子どもが多いという傾向が窺える。また，授業等に集中して参加することが困難であったり，課題等を提出しづらかったりする傾向があることが分かった。そのため，学習が遅れがちになったり，授業が分からなくなったりすることで成績不振や自己肯定感の低下を招き，結果として不登校に繋がってしまうことが推測された。

一方「読む」「書く」領域にチェックがなかったことについては，来所相談の特性上把握が難しい項目であることが考えられる。こうした行動の偏りを把握するためには，相談の中で聞き取りを行う等の手立てが必要と思われる。

以上のことから，発達障がいの行動特徴を示す不登校児童生徒は，早期にその行動特徴に対する適切な支援を行うことで発達障がいの二次障がいとしての不登校を予防したり，不登校の長期化からの回復を目指せるのではないかと思われる。このため，実態把握より明らかになった行動の偏りの多かった項目について，特別支援教育の視点を踏まえた対応の手引きが必要であると考えられる。

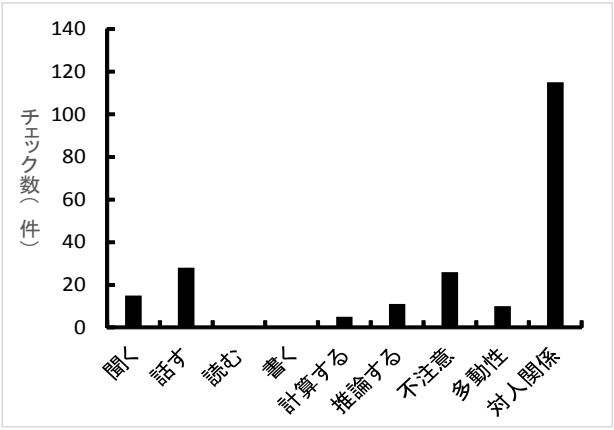


図１　過去の相談事例における「つまずきチェックシート」各領域のチェック件数

表１　チェック数が4件以上あった4領域20項目

領域	項目
聞く	・話し合いが難しい。（話し合いの流れが理解できず，ついていけない。）
話す	・適切な速さで話すことが難しい。（たどたどしく話す。とても早口） ・ことばにつまることがある。 ・単語を羅列したり，短い文で内容的に乏しい話をする。 ・思いつくままに話すなど，筋道の通った話をするのが難しい。 ・内容をわかりやすく伝えることが難しい。
不注意	・指示に従えなかったり，課題を最後までやり遂げられなかったりする。 ・集中して努力を続けなければならない課題（勉強や宿題等）を避ける。
対人関係やこだわり等	・他の子どもは興味を持たないことに興味があり，「自分だけの世界」を持っている。 ・とても得意なことがある一方で，極端に苦手なものがある。 ・いろいろな話をするが，その時の場面や相手の感情や立場を理解しない。 ・共感性が乏しい。 ・友達と仲良くしたいと思っても，友達関係をうまく築けない。 ・友達のそばにいるが，一人で遊んでいる。 ・仲の良い友人がいない。 ・常識が乏しい。 ・球技やゲームをする時，仲間と協力することに考えが及ばない。 ・ある行動や考えに強くこだわることによって，簡単な日常の活動ができなくなることがある。 ・自分なりの独特な日課や手順があり，変更や変化を嫌がる。 ・特定の物に執着がある。

３　手引きの試作

（１）目的

「つまずきチェックシート」を用いた試行的な実態把握により明らかになった不登校生徒が

示しやすい発達障がいの行動特徴である４領域20項目について，特別支援教育の指導方法を導入した相談対応の手引き（以下，手引きと記す）を試作する。

（２）方法

手引きの試作は，総合教育センター特別支援・相談課特別支援担当指導主事５名が行った。手引きは領域別に作成した。各領域の項目に示された行動特徴に対して，各指導主事が自らの特別支援教育の指導及び相談経験に基づく対応方法とその具体例をカードに記述した（表２）。記述したカードは，互いに説明した。さらに，項目ごとにカードを再配置し，重複する記述の削除や具体例の追記等を行った（資料２）。

表２　対応方法記述カードと記述例

領域：対人関係やこだわり等
項目：友だちと仲良くしたいと思っても，友だち関係をうまく築けない。
対応方法（1枚に1つ）と例 「友だち」や「仲良く」とはどういうことか，子どもに具体例を挙げさせ，書き出す。次に，書き出したものの中から，子どもに「誰と」「何が」できそうか，目標を具体的に設定させる。 例： 「友だち」→A君，Bさん，いとこのCさん，となりのお兄さん 「仲良く」→挨拶する，顔を見る，笑いかける，テレビの話をする， 目標：となりのお兄さんに，毎朝，挨拶する。いとこのCさんが家に来た時，テレビの話をする。

※あまり特別支援の経験が無い人でも実施可能な記述を目指す。

（３）結果と考察

発達障がいの行動特徴を示す不登校児童生徒の手引きの試作版（一部）を資料２に示した。

試作した手引きの妥当性を検討するために，これまで特別支援教育に関わることが少なかった相談担当指導主事３名が，「話す，聞く」領域の６項目について自らの指導及び相談経験に基づく対応方法を記述し，作成された手引きの記述と比較した。その結果，特別支援担当が試作した手引きには「構造化」「コミック会話」といった特別支援教育特有の方法論や具体的な教材及び指導方法等の記述が多い反面，相談担当に多かった相談者の受容的な態度に関する記述が比較的少ないことが明らかになった。

このことから，実際の相談場面において試行的に手引きを活用しながら，相談者が特別支援教育に特有な方法論や指導法を適用できるか，手引きに相談者の受容的な態度等に関する記述をするべきかについて，今後の検討が必要であると考えられる。

Ⅳ　研究の成果と今後の課題

本年度の研究成果としては，以下が挙げられる。先行文献の研究からは，発達障がいのある児童生徒は不登校のリスクが高いこと，PDDやADHDといった障がい種と不登校との関連性が示唆されること，それぞれの行動特徴に応じた対応が必要であること等が明らかになった。一方，発達障がいの特性を踏まえた不登校のチェックリスト等は見当たらなかった。また，特別支援・相談課における過去の不登校相談事例に対して「つまずきチェックシート」を用いて遡及的なチェックを行ったところ，「対人関係」「聞く」「話す」「不注意」等の項目のチェック数が多く，こうした行動特徴を示す不登校児童生徒が一定数存在することが示唆された。さらに，不登校児童生徒が示しやすい行動特徴に対して，特別支援教育の指導方法を導入した相談対応の手引きを試作した。

今後の課題としては，学校で不登校傾向を示し，かつその背景に発達障がいの特徴があることが疑われる児童生徒に対して，教員がその行動特徴の把握と個別の対応方法の策定ができるチェックリストを含めた「相談対応の手引き（仮)」の完成を目指すことが重要である。そのためには，特別支援・相談課の教育相談業務の中でチェックリスト及び対応の手引きを試行的に活用し，その改善を進めることが必要である。また，教員が「相談対応の手引き（仮)」を活用するための研修を

開発することも必要である。

参考文献

・愛知県総合教育センター『平成25年度研究紀要　第103集』, 2013年
・文部科学省「平成26年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」, 2015年
・文部科学省「今後の不登校への対応の在り方について　不登校問題に関する調査研究協力者会議」, 2003年
・文部科学省「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」, 2012年
・中野明徳「発達障がいが疑われる不登校児童生徒の実態－福島県における調査から－」, 2008年,『福島学総合教育研究センター紀要第６号』
・小野昌彦「不登校状態を呈する発達障がい児童生徒の支援に関する研究動向」, 2012年,『特殊教育学研究』50 (3)305-312
・加茂聡・東條吉邦「発達障害の視点から見た不登校－実態調査を通して－」, 2009年,『茨城大学教育学部紀要』58,201-220
・栗田広「広汎性発達障害」, 1998年,『全国心身障害児福祉財団』
・武井明・宮崎健祐・目良和彦・松尾徳大・佐藤譲・原岡陽一・鈴木太郎・平間千絵「不登校を呈した高機能広汎性発達障害の臨床的検討」, 2009年,『精神医学』51,289-294
・徳島県立総合教育センター「通常の学級に在籍している特別な支援を必要とする子どものチェックシート」, 2006年

資料１　通常の学級に在籍している特別な支援を必要とする子どものチェックシート

チェックシートⅢ　つまずきチェックシート［小・中・高校生用］

小・中・高1／2

学校	年	番号	性別　男・女

領域　1「聞く」（チェック：0＝ない，1＝まれにある，2＝ときどきある，3＝よくある）

						得点
1	聞き違いがある。（「知った」を「行った」と聞き間違える。）	3	2	1	0	
2	聞きもらしがある。	3	2	1	0	
3	個別に言われると聞き取れるが，集団指示では難しい。	3	2	1	0	
4	指示の理解が難しい。	3	2	1	0	
5	話し合いが難しい。（話し合いの流れが理解できず，ついていけない。）	3	2	1	0	
			得点合計			

領域　2「話す」（チェック：0＝ない，1＝まれにある，2＝ときどきある，3＝よくある）

						得点
1	適切な速さで話すことが難しい。（たどたどしく話す。とても早口。）	3	2	1	0	
2	ことばにつまることがある。	3	2	1	0	
3	単語を羅列したり，短い文で内容的に乏しい話をする。	3	2	1	0	
4	思いつくままに話すなど，筋道の通った話をするのが難しい。	3	2	1	0	
5	内容をわかりやすく伝えることが難しい。	3	2	1	0	
			得点合計			

領域　3「読む」（チェック：0＝ない，1＝まれにある，2＝ときどきある，3＝よくある）

						得点
1	初めて出てきた語や，普段あまり使わない語などを読み間違える。	3	2	1	0	
2	文中の語句や行を抜かしたり，繰り返し読んだりする。	3	2	1	0	
3	音読が遅い。	3	2	1	0	
4	勝手読みがある。（「いきました」を「いました」と読む。）	3	2	1	0	
5	文章の要点を正しく読みとることが難しい。	3	2	1	0	
			得点合計			

領域　4「書く」（チェック：0＝ない，1＝まれにある，2＝ときどきある，3＝よくある）

						得点
1	読みにくい字を書く。（字の形や大きさが整っていない。まっすぐにかけない。）	3	2	1	0	
2	独特の筆順で書く。	3	2	1	0	
3	漢字の細かい部分を書き間違える。	3	2	1	0	
4	句読点が抜けたり，正しく打つことができない。	3	2	1	0	
5	限られた量の作文や，決まったパターンの文章しか書けない。	3	2	1	0	
			得点合計			

領域　5「計算する」（チェック：0＝ない，1＝まれにある，2＝ときどきある，3＝よくある）

						得点
1	学年相応の数の意味や表し方についての理解が難しい。	3	2	1	0	
2	簡単な計算が暗算でできない。	3	2	1	0	
3	計算をするのにとても時間がかかる。	3	2	1	0	
4	答えを得るのにいくつかの手続きを要する問題を解くのが難しい。	3	2	1	0	
5	学年相応の文章題を解くのが難しい。	3	2	1	0	
			得点合計			

領域　6「推論する」（チェック：0＝ない，1＝まれにある，2＝ときどきある，3＝よくある）

						得点
1	学年相応の量を比較することが難しい。（長さやかさの比較。「15cmは150mm」ということ。）	3	2	1	0	
2	学年相応の図形を描くことが難しい。（丸やひし形などの図形の模写。見取り図や展開図。）	3	2	1	0	
3	事物の因果関係を理解することが難しい。	3	2	1	0	
4	目的にそって行動を計画し，必要に応じてそれを修正することが難しい。	3	2	1	0	
5	早合点や飛躍した考えをする。	3	2	1	0	
			得点合計			

領域　7「不注意」（チェック：0＝ない，1＝ときどきある，2＝しばしばある，3＝非常にしばしばある）
※得点換算方法：0と1＝0点　2と3＝1点

						得点
1	学校での勉強で，細かいところまで注意を払わなかったり，不注意な間違いをしたりする。	3	2	1	0	
2	課題や遊びの活動で注意を集中し続けることが難しい。	3	2	1	0	
3	面と向かって話しかけられているのに，聞いていないように見える。	3	2	1	0	
4	指示に従えなかったり，課題を最後までやり遂げられなかったりする。	3	2	1	0	
5	学習課題や活動を順序立てて行うことが難しい。	3	2	1	0	
6	集中して努力を続けなければならない課題（勉強や宿題等）を避ける。	3	2	1	0	
7	学習課題や活動に必要な物をなくしてしまう。	3	2	1	0	
8	気が散りやすい。	3	2	1	0	
9	日々の活動で忘れっぽい。	3	2	1	0	
			得点合計			

領域　8「多動性―衝動性」（チェック：0＝ない，1＝ときどきある，2＝しばしばある，3＝非常 にしばしばある）
※得点換算方法：0と1＝0点　2と3＝1点

						得点
1	手足をそわそわ動かしたり，着席していても，もじもじしたりする。	3	2	1	0	
2	授業中や座っているべき時に席を離れてしまう。	3	2	1	0	
3	きちんとしていなければならない時に，過度に走り回ったりよじ登ったりする。	3	2	1	0	
4	遊びや余暇活動におとなしく参加することが難しい。	3	2	1	0	
5	じっとしていない，または何かに駆り立てられるように活動する。	3	2	1	0	
6	過度にしゃべる。	3	2	1	0	
7	質問が終わらない内に出し抜けに答えてしまう。	3	2	1	0	
8	順番を待つのが難しい。	3	2	1	0	
9	他の人がしていることをさえぎったり，じゃまをしたりする。	3	2	1	0	
			得点合計			

領域　9「対人関係やこだわり等」（チェック：0＝いいえ，1＝多少，2＝はい）

					得点
1	大人びている，ませている。	2	1	0	
2	みんなから「○○博士」「○○教授」と思われている。（例：カレンダー博士）	2	1	0	
3	他の子どもは興味を持たないことに興味があり，「自分だけの世界」を持っている。	2	1	0	
4	特定の分野の知識を蓄えているが，丸暗記であり，意味をきちんとは理解していない。	2	1	0	
5	含みのある言葉や嫌みを言われてもわからず，言葉通りに受け止めてしまうことがある。	2	1	0	
6	会話の仕方が形式的であり，抑揚なく話したり，間合いが取れなかったりすることがある。	2	1	0	
7	言葉を組み合わせて，自分だけにしかわからないような造語を作る。	2	1	0	
8	独特な声で話すことがある。	2	1	0	
9	誰かに何かを伝える目的がなくても場面に関係なく声を出す。（唇を鳴らす，咳払い，喉を鳴らす，叫ぶ。）	2	1	0	
10	とても得意なことがある一方で，極端に苦手なものがある。	2	1	0	
11	いろいろな話をするが，その時の場面や相手の感情や立場を理解しない。	2	1	0	
12	共感性が乏しい。	2	1	0	
13	周りの人が困惑するようなことも，配慮しないで言ってしまう。	2	1	0	
14	独特な目つきをすることがある。	2	1	0	
15	友達と仲良くしたいと思っても，友達関係をうまく築けない。	2	1	0	
16	友達のそばにはいるが，一人で遊んでいる。	2	1	0	
17	仲の良い友人がいない。	2	1	0	
18	常識が乏しい。	2	1	0	
19	球技やゲームをする時，仲間と協力することに考えが及ばない。	2	1	0	
20	動作やジェスチャーが不器用で，ぎこちないことがある。	2	1	0	
21	意図的でなく，顔や体を動かすことがある。	2	1	0	
22	ある行動や考えに強くこだわることによって，簡単な日常の活動ができなくなることがある。	2	1	0	
23	自分なりの独特な日課や手順があり，変更や変化を嫌がる。	2	1	0	
24	特定の物に執着がある。	2	1	0	
25	他の子どもたちから，いじめられることがある。	2	1	0	
26	独特な表情をしていることがある。	2	1	0	
27	独特な姿勢をしていることがある。	2	1	0	
		得点合計			

資料２　発達障がいの行動特徴を示す不登校児童生徒の手引きの試作版（一部分を掲載）

２－４思いつくままに話すなど，筋道の通った話をするのが難しい。

口頭での会話を視覚化する工夫 **子どもの話した内容を紙やホワイトボードに書き，視覚的に振り返ることができるようにする。**
子「友だちの視線が怖いんです」 紙に友だちの視線が怖いと書き，「友だちって誰ですか？」と質問する。 子「A君，B君，Cさんです」 A君，B君，Cさんと書き加え，「友だちは見るだけですか，何か話していますか」と質問する。 子「何かしゃべっていることが多いと思います」 何かしゃべっていると書き加え，「話の内容を聞いたことがありますか？」…

話題に関係のある話を増やし（強化），関係の無い話を減らす（消去）する方法 **今の話題を紙やホワイトボードに書く（話題が変わる度に書き直す）。話題に関係がある話をしたら目を合わす，ほほえむ，相づちを打つ。話題に関係の無い話をしたらよそ見をしたり，表情を動かさなかったり，気のない相づちを打ったりする。話題がそれてきたら，話題に関連する質問をする。**
今の話題：できそうな家のお手伝いを探す 子「掃除かなあ」T「へー，いいね（笑顔，激しく頷く）」子「前に掃除した時，蜂が飛んできたの。蜂蜜って大好き」T（窓の外を見る，頭をかく）（急に子の方を見て）「どこの掃除する，お風呂？トイレ？」子「お風呂がいいな」T「そう！お母さんが喜ぶね（笑顔）」子「母さんはスイーツ好き」T（無反応）「いつもは誰が掃除してる？」

本人が話しをした内容を繰り返して言い，本人に自分の言葉を意識させる。 **話しが止まらなくなりそうなときは，一度言葉を繰り返して会話を止め，本人の話をもとにふくらませたり筋道が通るような方向へ振り返りをしながらもっていく。**
「先生，プリントできました。昨日母さんとフジグランいったんよ！」 「プリントの見直しはしましたか。」 「はい，しました。ほんでな，漫画こうてもうたんよ。」 「採点するので，いっしょに確認しますか。」

はじめにどんな話がしたいかを決め，それに関する細かな内容を書き出し，全体の話の筋道を構成する。
①昨日帰ってからの出来事を話題とする。 ②実際にあった出来事に関すること（何があったのか？，その時どうなったのか？等）を１枚の付箋に１つずつ書く。 ③それらの付箋を並べ替えて，話の筋道を作る。 ④それを読みながら，発表する。

７－６集中して努力を続けなければならない課題（勉強や宿題等）を避ける。

課題の量を減らして，「課題に取り組むこと」のハードルを下げる方法 **課題の量を絶対できそうな分量に減らす。絶対できそうな分量の目安は，現在(あるいは以前)やった量の最低ラインにあわせる。ゼロ(全くやっていない)ことが続いている時は，１問だけ解くことから始める。しばらくやってみて「課題をする」ことが定着したら，少しずつ課題の量を増やす。**
学校と家庭であらかじめ「課題の量を減らす」ことを合意しておく。 算数の宿題は2枚あるが1枚の半分だけできればよいことにし，半分のところに赤線を引いて「ここまでできれば，おしまい」と書き込む。子どもができたら大いにほめる。 子どもが「できない」と言ったら，「どこまでだったらできる？」と言い，子どもと一緒に量を決める。１週間ぐらい続けてできたら「毎日クリアできたね。今日からは，ここまでできたらミッションクリアだよ」と少しずつ量を増やす。
20問のドリルを5問ずつ区切ってプリントにする。 何回かに分けて短い時間集中して取り組ませる（１枚は児童館，１枚は夕食前等)。 １枚できたら○をつけ褒める。あるいは自分で答え合わせをさせ，褒める。

興味関心のあるものを課題にして，「課題に取り組むこと」のハードルを下げる。身体活動などゲーム感覚で取り組めるような課題を導入しても良い。
興味関心のあるもの：絵を描く，作品を作る等 課題：明日までに文化祭のクラス展示計画図を描く。
身体をゆっくりと動かす→ゆっくり手を開いたり閉じたりする。 水のいっぱい入ったコップをこぼれないように持ち，移動する。 遠くから転がしたボールを両手でキャッチする。等

課題の困難さの段階を検討し，簡単なものから難しいものへ順番に提示する。
・簡単な課題 考える必要も無く，一目瞭然で答えがわかるような課題 答えが示されていて，写すだけで良い課題 ・少し難しい課題 少し考えたり，ノートや教科書を見ると答えがわかるような課題 ※どの場所を参照するか示しておく必要有り。 答えが示されているが，部分的にカッコ抜きされている課題 ・難しい課題 よく考えたり，誰かに教えてもらわないとわからない課題 ※誰にどのように質問をするかを示す必要有り。

課題をしたら「何かよいこと」が得られる仕組みを導入する方法 **子どもの興味関心の対象，子どもにとって起きたらうれしい出来事，あったらうれしいもの等を書き出す。その中で，ご褒美として使えそうなものをリストアップする。課題をしたら，その量や難しさに見合うご褒美を渡す。**
子どもにとってよいこと「おやつ，ジュース，あすたむらんど，キャラクター人形，図鑑，電車の本」 宿題をしたらおやつかジュースのお代わりができる。３日連続でできたら，キャラクター人形のガチャガチャができる。それを我慢して５日間連続したら，あすたむらんどか，図鑑，電車の本のどれかが手に入る。

トークンエコノミー **課題をしたら貼るシールと表を準備する（コインチップやビー玉を瓶に集めてもよい）。子どもの興味関心の対象，うれしい出来事，欲しがるもの等からご褒美の一覧表を作り，それぞれが何枚のシールと交換できるか決めておく。課題をしたらシールを渡し，一定量集まったらご褒美と交換する。**
ご褒美一覧表「シール３枚：バナナ，かっぱえびせん，コカコーラ」「シール6枚：週刊漫画雑誌，コンビニのサンドイッチ，ゲームの１時間延長」「シール10枚：映画，CD」 勉強をしたノート1ページ，宿題プリント１枚についてシールを１枚渡す。シールはカレンダーに貼る。シールがたまったらご褒美と交換する。

９－18常識が乏しい。

常識やルールを視覚化して伝える方法 **まず，身につけて欲しいルールやマナーを本人が理解できるように紙に書く。何故そうした方が良い（得である）のかを書き添える。周囲の教員や子どもが，そのことを守れているかどうかも検討しておく。**
「相手や場所に応じて，丁寧な言葉を話します。」 友達・家族「おはよう」，その他「おはようございます」 友達でも授業中は丁寧な言葉を使います。「もう一度言ってください」など 理由は，「丁寧な言葉で話すと好感度がアップするから」 （他の例） 挨拶をする。ごみがおちていたらひろう。トイレのスリッパをそろえる。人が集まるところでは静かにする。人のものは黙って使わない。など ※家庭や学校の周りの人ができていないと身につけにくい。まず周りから。

「普通，知っていて当たり前」のことでも，「知らないかも？」と疑いつつ関わる。知らないことがわかった時には，理由等を付け加えながら説明する。納得しにくい場合はトークンシステム等を併用し，常識に沿うことを賞賛し，行動の定着を図る。
〈知っていて当たり前のこと〉 人と同じことをしなければいけない時がある。 1番になれなくても，100点が取れなくても，人間には価値がある。 何かをしてもらったら，お礼を言う。 〈そうする理由〉 立派な大人は，仕事で人と同じことをして給料をもらっているから。 大人の仕事は難しくて100点取れないのが当たり前。今は，それを我慢する練習。 人はお礼を言われるとうれしくなり，「またしてあげたい」という気持ちになるから。

市販の教材を用いてルール等を教える。
総合教育センターにある市販教材の例 SSTカード，SSTボードゲーム，DVD「小1プロブレム予防STARTプログラム」，ソーシャルスキルについての書籍

手順に沿ってソーシャルスキル・トレーニングを行う。「教示→モデリング→ロールプレイ→フィードバック（強化または修正）→般化」
教示：目上の人に敬語を使うのは「礼儀正しい人だな」と思ってもらうためです。 モデリング：目上の人に敬語を使う手本を見せる。 ロールプレイ：友だち同士で目上の人役，生徒役に分かれて敬語を使う練習をする。 フィードバック：互いの良かった点をほめる。修正点があれば伝え，練習させる。 般化：日常場面で敬語が使えていたらほめるように，教員や家庭に連絡する。

子ども参加型体験講座の充実に向けた研究実践

―親子（家族）で参加できる体験型講座による若い世代の生涯学習の推進―

生涯学習課　森 保裕　猪子 研司

要　　旨

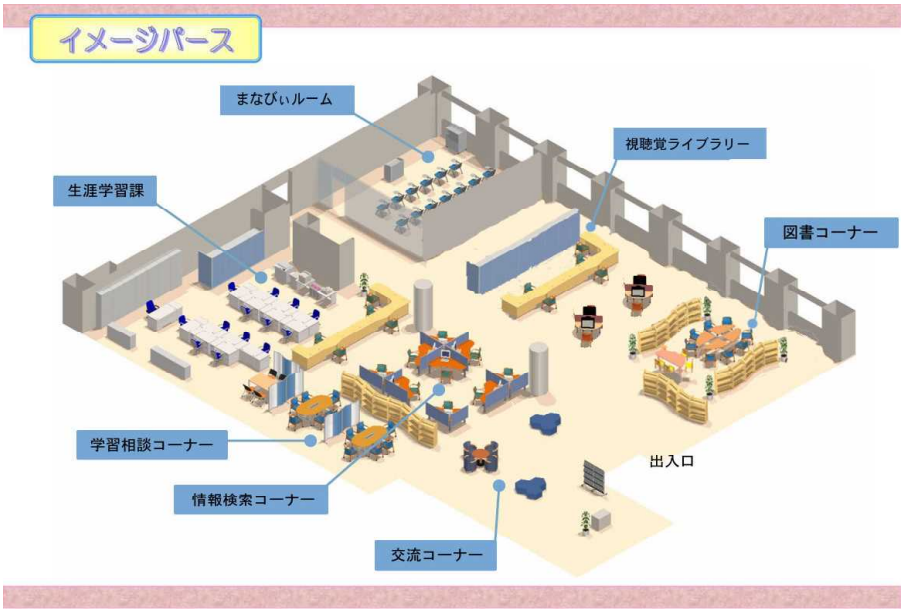
生涯学習課では，子どもから大人までの生涯にわたる学びをサポートするため，様々な情報の提供や各種講座を開催しているが，受講者はシニア世代が多い。そこで，子ども参加型体験講座を行ったところ，幼少期からの学び支援，家庭教育支援，若い世代や子ども世代の参加推進などの成果とともに，体験活動での安全確保，天候の変化への対応などの課題が見られた。

キーワード：幼少期からの学びの支援，家庭教育支援，若い世代や子ども世代の参加推進

Ⅰ　はじめに

生涯学習課では，総合教育センターの１階に設置されたマナビィセンターに次の６つのコーナー（図１）を設け，県民の生涯学習の振興に寄与するため，学習の機会や場の提供，講座の実施などに取り組んでいる。

講座受講者はシニア世代が多く，若い世代や子ども世代の参加推進が課題である。

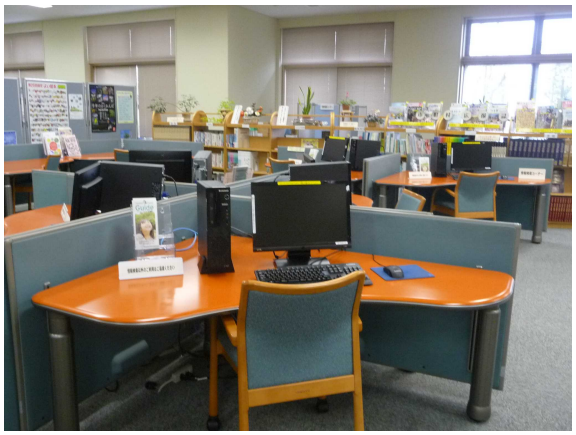


①生涯学習や子育て，教育，子ども用図書等を備えた「図書コーナー」

②各教科や特別活動等に関するビデオ・DVD，視聴ブースを備えた「視聴覚ライブラリー」

③生涯学習に関する活動に利用できる
「まなびぃルーム」

④生涯学習の発表の場としての
「交流コーナー」



⑤イベント，講座，団体・サークル，指導者等の検索ができる「情報検察コーナー」

⑥生涯学習・家庭教育等についての質問や相談に対応する「学習相談コーナー」

図１　マナビィセンターの６つのコーナー

Ⅱ　研究仮説

次の３つの仮説に基づき，研究を行った。

・子どもが参加できる講座の充実を図ることで，幼少期からの学びの支援及び生涯学習の推進を図ることができる【幼少期からの学び支援】。

・親子（家族も含む）で参加する体験型講座を実施することで，家庭教育支援を推進することができる【家庭教育支援】。

・子どもや親子（家族も含む）で参加する体験型講座を充実させることで，若い世代や子ども世代からの生涯学習への参加を推進することができる【若い世代や子ども世代の参加推進】。

Ⅲ　研究の実際

１　講座の企画・広報・募集

（１）ほのぼの家庭教育づくりプログラム「父親力ルネサンス推進講座」

①　企画

少子化や地縁的結合の希薄化によって，家庭の教育力の低下が指摘されているなか，自然体験活動など，子どもと共に活動できるプログラムを通して，親子の絆を深めるとともに，家庭教育・地域教育への参画推進に取り組もうとする父親を養成する講座で，定員は20組である。平成27年度は７月～８月に全４日間で実施した。

ほのぼの家庭教育づくりプログラム事業2015
主催 徳島県教育委員会

父親力（ちちおやりょく）ルネサンス推進講座

お父さんたち、大いに子育てを楽しんでみませんか

第1回

7月26日（日）
10：00～12：00 「お父さんと一緒に体を使って遊ぼう！」
講師：四国大学短期大学部准教授　河上 陽子 さん

13：00～15：00 「夏の星座を調べてみよう」
講師：徳島県立総合教育センター
学校経営支援課班長　元山 茂樹 さん

会場：徳島県立総合教育センター

第2回

8月　8日（土）
13：00　牟岐少年自然の家（牟岐町）集合
13：00～14：00　オリエンテーション他
14：00～16：00　「シュノーケリング体験」（プール）
16：30～18：00　親子でカレー作り
18：00～18：30　夕食・後片付け
18：30～20：00　入浴
20：00～21：00　天体観測

8月　9日（日）
7：10～　朝食（朝食後　退所準備）
8：45～12：00　「牟岐大島シュノーケリング」
12：00～12：50　昼食・休憩
12：50～　解散

第3回

8月23日（日）
10：00　徳島県立佐那河内いきものふれあいの里「昆虫観察の森」（佐那河内村）集合
10：00～12：00　昆虫・植物観察
12：00～12：40　昼食
12：40～14：00　昆虫・植物観察
14：00　解散
講師：徳島県立佐那河内いきものふれあいの里スタッフ
センター長　大原 賢二 さん（昆虫・小動物担当）
観察指導員　東　衛史 さん（植物担当）
観察指導員　市原 眞一 さん（昆虫・小動物担当）

対　象　小学校3年生から5年生の子供と男性の保護者で、全日程参加できる方

定　員　20組（1組2名ないし3名）
応募者多数の場合は平成23～26年度本講座受講者の方には御遠慮いただくとともに、抽選とさせていただきます

受講料　無料
但し、8月8日～9日の一泊研修に係わる費用（夕食・朝食・昼食費、施設宿泊費、牟岐大島への渡船代、保険料等）及び8月23日の保険料は参加者負担
大人4，100円程度、子供3，600円程度

申込・お問い合わせ

☆申込用紙に必要事項を記入の上、徳島県立総合教育センター生涯学習課学習支援担当にファクシミリ・電話・電子申請にてお申し込みください。なお、ファクシミリでの申込の際には、送信後、電話での確認もお願いします。
（電子申請は、右のQRコードを携帯電話で読み取り、必要事項を入力してください。）
☆雨天時の対応や気象警報発表時等における講座中止等について
・気象条件により、プログラムを変更する場合があります（小雨決行）。
・気象警報発表、台風接近及び荒天が予想される場合には、第1回、第2回は中止、第3回は8月29日に延期します。
・講座を中止または延期する場合は、前日の午後から当日の朝8時までに受講者に電話で連絡します。
☆その他
・全日程の研修終了者には、修了証書を交付します。
・本人同意の上、徳島県生涯学習情報システムに指導者として登録します。
・本講座の様子はホームページ等で公開しますので、あらかじめご了承ください。
・本講座は、県立総合大学校教育社会学部主催講座です。1時間につき1単位（すだちくんシール1枚）修得できます。
・収集した個人情報は厳重に管理し、必要な範囲内で利用させていただきます。

締切　平成27年7月15日（水）

徳島県立総合教育センター
生涯学習課学習支援担当

〒779－0108
板野郡板野町犬伏字東谷1－7
電　話（088）672－5400
ファクシミリ（088）672－5462

平成27年度　父親力ルネサンス推進講座参加申込書

男性保護者（ふりがな）	（　　）歳
子供（ふりがな）	性別（　　）（　　）小学校（　　）年
子供（ふりがな）	性別（　　）（　　）小学校（　　）年
住　所	〒
連絡先（電話番号）	
健康上留意すべき事項（保護者・子供）	

図２　「父親力ルネサンス推進講座」チラシ

② 広報・募集

チラシ（図２）を，県内の全小学校の管理職が来所する研修会（６月５日）の際に持ち帰ってもらい，３年・４年・５年生全員に配付した。募集は，ＱＲコード，電話，ファクシミリで行い，50組の応募があり，抽選により21組（父親21人，子ども25人）の受講が決定した。

（２）生涯学習課主催講座「親子で楽しむ体験広場」「子ども体験広場」

① 企画

生涯学習課主催の様々な講座を通して基本的な技術を学び，習得した技術を地域に広めることで，地域住民の交流や子育て支援の場づくりができる人材を育成するとともに，親子や受講者同士の交流を深める場とする。また，自分の資格やスキルを活かして講座を開設しようとする県民に，講師としてのスキルアップを図っていただく。また，会場の提供や受講者募集の支援を行う。

【親子で楽しむ体験ひろば】

講座名	講師	日時	会場	定員	材料費等
ベビー講座	渡邉 加奈子 NPO法人ロイヤルセラピスト協会認定講師 ベビーマッサージセラピスト ファーストサインセラピスト	毎月 第３水曜日 （4・8月をのぞく。ただし，10月は第２水曜日・12月は第４水曜日・2月は第４水曜日） 10:30～11:30 第１回 5月20日	和室 研修室	生後１ヶ月～２歳までの赤ちゃんとママ10組	オイル代等 毎回500円
こどもと楽しむアロマとハーブ	竹内 静香 公益社団法人アロマ環境協会認定アロマテラピーインストラクター	毎月 第２金曜日 （4月・8月をのぞく） 10:30～12:00 第１回 5月8日	まなびいルーム	お子様をお持ちの女性，妊婦さん10組 ※親子同伴でなくても可	材料費として 毎回500円～1,000円
親子で楽しむ編み物講座	嘉重 米子 日本編物文化協会特別正会員（徳島県リーダー）	毎月 第２土曜日 （4・8月をのぞく。ただし，6月は第４土曜日） 13:30～15:00 第１回 5月9日	まなびいルーム	幼稚園６歳～中学生 10名	教本代として 初回に1,000円
親子で楽しむ映画会		毎月 第１・３日曜日 10:00～，14:00～ 第１回 4月 5日	まなびいルーム	親子 20名	無 料
おはなしと折り紙	田村 真弓	毎月 第２・４土曜日 13:30～15:00 第１回 4月11日	図書コーナー	誰でも 20名	無 料

【子ども体験ひろば】

講座名	講師	日時	会場	定員	材料費等
あそび子ども邦楽教室	猪井 恵美子 徳島県邦楽協会常任理事 （財）日本当道音楽会師範	毎月 第１・３土曜日 （ただし，4・5月は第１・４土曜日，8月は第１・５土曜日，10月は第３・４土曜日，1月は第２・４土曜日，2月は第３土曜日，3月は第３・４土曜日） 13:30～15:00 第１回 4月25日	研修室 4・5	3才～小学生	初回に 琴爪（2，500円） 購入

図３ 「親子で楽しむ体験広場」「子ども体験広場」チラシ

② 広報・募集

チラシ（図３）を保育所・幼稚園・小学校等を通して配布するとともに，総合教育センターホームページ，新聞，ケーブルテレビ等を活用して広報を行った。

募集は，電話又はファクシミリで行い，その結果，181人の受講が決定した。

（３）平成27年度新規事業「ファミリー体験学習推進プロジェクト」

① 企画

「開かれた総合教育センター」のステップアップのために，総合教育センターの職員や生涯学習情報システムに登録された人材・指導者を活用した体験学習や体験活動を実施し，指導力の向上を図るとともに，総合教育センターの施設の活用を推進する。

また，本講座は，家族で参加できる様々な体験学習や体験活動を通して，家族の絆をより深めるとともに，子どもの学習への興味関心や意欲の向上を図ることを目的として開講され，平成27年度は11回実施した。

ファミリー体験学習推進プロジェクト
前期参加者募集
子どもたちに、様々な体験学習の場を提供します。
全ての体験学習は、９時４０分から受付、１０時開始、１２時終了です。

No	日時	テーマ	内容	対象者	人数	材料費	QRコード
1	6月27日（土）	プレイルームで「わくわく体験」おもいっきり遊んじゃおう！	プレイルームにある遊具（ボールプール・ぶらんこ・積み木・的当て・輪投げなど）の体験をします。	幼児・小学生と保護者	子ども10人程度	無料	1
2	7月11日（土）	親子で和楽器を演奏しよう！	琴や和太鼓で、親子で簡単な曲を演奏します。和楽器に触れる良い機会になること間違いありません。	小学生と保護者	保護者を含め40人	無料	2
3	8月 9日（日）	夏休みに親子で工作をしよう！	木材を使って、親子で工作をします。	小学生と保護者	6家族	親子で800円	3
4	8月22日（土）	保冷剤で作るキラキラ★アロマ消臭ポット	保冷剤を使って、キラキラと輝く、アロマの香りのする消臭ポットをつくります。	小学校3年生以上と保護者	保護者を含め20人	作成する人はひとりにつき500円	4
5	9月12日（土）	デジタル教材を使って郷土「とくしま」を学ぼう！	総合教育センターのe-ラーニングシステムを使って、郷土や防災に関する問題に親子で挑戦します。	小学生と保護者	保護者を含め20人以下	無料	5
6	9月19日（土）	川原の石で岩石標本セットをつくろう！	県内の川原で採集した石を使って岩石標本セットをつくります。石の名前のつけ方や徳島県の川原に見られる石の特徴について学習しましょう。	小学生以上と保護者	保護者を含め20人	作成する人はひとりにつき100円	6
		フィルムケースロケットを飛ばそう！	フィルムケースを使ってロケットを作り、簡単な化学反応を利用してロケットを飛ばします。身近な物質の不思議な力を実感してみましょう。	小学生以上		作成する人はひとりにつき100円	

平成27年度 徳島県立総合教育センター主催 体験学習
ファミリー体験学習推進プロジェクト
後期参加者募集
子供たちに、様々な体験学習の場を提供します。
NO１・３・４・５は、午前９時４０分から受付、午前１０時開始、正午終了です。
NO２ みんなで楽しむ、かんたん和太鼓教室は、１２時４０分から受付、午後１時開始、午後３時終了です。
テーマにより QR コードが異なります。ご注意ください。

No	日時	テーマ	内容	対象者	人数	材料費	QRコード
1	10月10日（土）	ポップコーンをつくろう！	水蒸気爆発を利用して、ポップコーンをつくります。	小学生以上と保護者	12家族	作成する人はひとり50円	
		葉っぱのしおりをつくろう！	葉脈を取り出し、好きな色をつけて【しおり】をつくります。			作成する人はひとり100円	
2	10月18日（日）	みんなで楽しむ、かんたん和太鼓教室	大きな太鼓や小さな太鼓はどんな音が出るのかな？楽しく、そして、かっこよくみんなで演奏しましょう。小学生、中学生、高校生の皆さんお待ちしています。	小学生以上と保護者	20家族程度	無料	
3	11月21日（土）	徳島の伝統的なおやつをつくろう！	地域の食材を使って簡単なおやつをつくります。	幼児・小学生と保護者	8家族	ひとり100円	
4	12月19日（土）	アロマを使った抗菌スプレーをつくろう！	アロマを利用した、抗菌スプレーをつくります。	幼児・小学生と保護者	10家族	作成する人はひとり500円	
5	1月30日（土）	プレイルームで「わくわく体験」おおうそんぶん遊んじゃおう！パートⅡ	プレイルームにある遊具（ボールプール・ブランコ・積み木・的当て・輪投げなど）の体験をします。	幼児・小学生と保護者	5家族	無料	

図４　「ファミリー体験学習推進プロジェクト」チラシ

②　広報・募集

チラシを（図４）保育所・幼稚園・小学校等を通して配布するとともに，総合教育センターホームページを活用して広報を行った。

募集は，ＱＲコードのみで行い，その結果，247人の受講が決定した。

Ⅳ　研究の成果と今後の課題

子ども参加型体験講座のアンケート結果に基づいて，講座内容や運営，実施時期等への満足度を確認するとともに，寄せられた意見・感想を分類して，３つの研究仮説である幼少期からの学び支援，家庭教育支援，若い世代や子ども世代の参加推進の検証，及び課題等を明らかにする。

１　ほのぼの家庭教育づくりプログラム事業「父親カルネサンス推進講座」

第１回講座　７月27日（日）総合教育センター大研修室

図５　第１回講座のようす

第１回講座のアンケート結果を以下に示す。対象：参加19組（男性の保護者19人，子ども23人，合計42人）

① この講座をどこで知りましたか。

チラシ	ホームページ	新聞	その他
15 80%	2 10%	0 0％	2 10%

② 本日の講座の内容はどうでしたか。

満足	やや満足	やや不満	不満
16 84%	3 16%	0 0％	0 0％

③ 本日の進行や運営はどうでしたか。

満足	やや満足	やや不満	不満
15 79%	4 21%	0 0％	0 0％

※上段　人数（人）
　下段　割合（%）

④ この講座の開催時期はどうでしたか。

満足	やや満足	やや不満	不満
17 89%	2 11%	0 0％	0 0％

⑤ 本日の講座で印象に残ったことや感想等を御記入ください。　※（　）の数字は同意見の人数

＜子ども＞
【幼少期からの学び支援】
・全部よかった。　・新聞を使った遊びがおもしろかった。　・新聞紙をラダーやバーにした遊びがよかった。　・新聞紙でとんがりコーンを作って遊んだのが楽しかった。　・金星の観察ができてよかった。（５）　・天体望遠鏡を使った観察がよかった。　・金星が月のように見えた。・星座の説明がとてもわかりやすかった。　・天体望遠鏡で金星や太陽の黒点が見えたのが心に残った。　・星座の勉強ができたこと。　・太陽の温度の低いところ（黒点）が見えたこと。・星座早見盤の製作がおもしろかった。（３）　・金星が変化（満ち欠けや大きさの変化）する事に感動した。
【家庭教育支援】,【若い世代や子ども世代の参加推進】
・友だちができて，一緒に金星を見た。

＜保護者＞
【幼少期からの学び支援】
・星座の勉強がよかった。（２）　・太陽や星について，他では聞かれないことが聞けて，とてもいい勉強になった。　・星座に興味がわいた。（２）　・太陽や星について熱中しそうである。・星座に色々な物語があっておもしろかった。　・大きな望遠鏡で金星や太陽を見たことが印象に残った。（４）　・金星が満ち欠けするとは知らなかった。　・新聞紙でも工夫しだいで色々な遊びができること。
【家庭教育支援】
・子どもとの触れ合い方，話し方などが参考になった。　・全体的に親子で協力する内容でありよかったと思う。　・子どもや他の家族と一緒に運動したこと。　・親子で並んで話を聞くというだけでなく，一緒に頭や身体を使って活動することが大切であると思っているので，午前・午後の講座ともとてもよかったと思う。　・身近な物（新聞）で親子が運動できることが改めて分かった。　・新聞紙や星座を通して，子どもと楽しく活動できてよかった。　・星座早見盤を使って子どもと星座を屋外で見ることができるようになれてよかった。　・父親同士で子どもとの遊び方が上手くなることができた。
【若い世代や子ども世代の参加推進】
・楽しく参加させてもらえた。　・父と子どもだけの講座は大変新鮮に感じられた。　・今回の内容がよかったので，第２回が楽しみである。
【課題等】
・ラミネーターの操作が難しかった。

⑥ 親子で参加して父親が子育てを楽しむためには，どのような講座が効果的であると思いますか。

【幼少期からの学び支援】
・少し高度な運動，例えば，跳び箱，マット，フラフープなど。　・体を動かす講座がいいと思う。　・工作，自由研究の講座があるといいと思う。

【家庭教育支援】
・親子が共同して何か（制作や活動等）をする。　・母親ではなかなかできない活動的で身体を使った講座がいいと思う。　・もっと広い場所で球技等ができればさらに盛り上がり，親子の絆も深まると思う。　・釣りやキャンプなど子どもと一緒に楽しめる講座。　・子どもと遊べる講座。　・子どもとの共同作業が，後で話し合いができるので，いいと思う。
【若い世代や子ども世代の参加推進】
・竹などを使って皿や箸を作り，バーベキューやキャンプをする。　・自然体験，海もいいが，川の体験もいいと思う。筏下り，船下り，カヤックなどの体験。　・戸外での遊びがいいと思う。
・野外での講座。　・キャンプ，虫取り，魚釣りなどのアウトドアでの活動がいいと思う。

第２回講座　８月８日（土）・９日（日）徳島県立牟岐少年親自然の家・牟岐大島

図６　第２回講座のようす

第２回講座のアンケート結果を以下に示す。対象：参加19組（男性の保護者19人，子ども23人，合計42人）

①　第２回講座の内容はどうでしたか。

満足	やや満足	やや不満	不満
18 95%	1 ５%	0 ０%	0 ０%

②　第２回講座の進行や運営はどうでしたか。

満足	やや満足	やや不満	不満
10 53%	8 42%	1 ５%	0 ０%

③　第２回講座の開催時期はどうでしたか。

満足	やや満足	やや不満	不満
17 89%	2 11%	0 ０%	0 ０%

※上段　人数（人）　下段　割合（%）

④　第２回講座で印象に残ったことや感想等を御記入ください。　※（　）の数字は同意見の人数

＜子ども＞
【幼少期からの学び支援】
・カレーを作ったり，海に潜ったり，星を見たこと。（２）　・シュノーケリングがとてもよかった。（５）　・プールでのシュノーケリングが楽しかった。　・海でシュノーケリングができたこと。　・海に行ったことが楽しかった。（２）　・海で魚が泳ぐ様子を見られてよかった。
・花火が見られたこと。
【家庭教育支援】，【若い世代や子ども世代の参加推進】
・友だちができたこと。　・知らない子と一緒に泊まって友だちになれたこと。　・みんなでのカレー作りが楽しかった。（２）

＜保護者＞
【幼少期からの学び支援】
・子どもも責任感を持って行動することを学び，団体生活を体験できた。
【家庭教育支援】
・カレー作り等の親子での協同作業がとてもよかった。（２）　・親子が，普段ゆっくりと話すことも少ないので，貴重な時間を持つことができた。　・かまどで火起こしなど，子どもと一緒に楽しめた。　・また子どもと来たい。
【若い世代や子ども世代の参加推進】
・少年自然の家のスタッフの方が親切で，自由行動の時間には，祭りの花火が見える場所に連れていってくれたり，天の川も見ることができて大満足である。　・牟岐少年自然の家の人気の高さに驚いた。　・普段できないシュノーケリングを体験できてよかった。（４）　・牟岐大島でシュノーケリングができたこと。　・父親同士の親睦も図れてよかった。　・カレー作り，シュノーケリングがよかった。（２）　・牟岐大島への船での移動。　・牟岐大島に行くのは初めてで，いい思い出になった。
【課題等】
・宿泊室のクーラーがありがたかったが，夜中に冷えすぎて体調を崩すところだった。　・もう少し親子だけで行うものがあった方がよい。　・参加者の自己紹介があった方がよい。　・天体観測が中止になった自由時間に何か他のことができればよかった。

⑤　親子で参加して，父親が子育てを楽しむためには，第２回講座（宿泊研修）として，どのような講座が効果的であると思いますか。

【幼少期からの学び支援】
・ゲームなど子どもたちだけのイベント　・カヌー，カヤックを使った講座
【家庭教育支援】
・シュノーケリングやカレー作り等の親子での協同作業が，今後の生活に役立つと思う。　・親子で協力できる内容。　・牟岐少年自然の家での宿泊が経費もかからずよい。
【若い世代や子ども世代の参加推進】
・現在の内容はよいと思う。（２）　・ゲートボールのようなゲームも取り入れてはどうか。
・筏作り，キャンプファイアー　・プレイホールでのドッジボール大会，花火など　・港が近いので，釣りなど。　・プールでのいろいろな遊び

第３回講座　８月23日（日）徳島県立佐那河内いきものふれあいの里「昆虫観察の森」

図７　第３回講座のようす

第３回講座のアンケート結果を以下に示す。対象：参加19組（男性の保護者19人，子ども23人，合計42人）

①　第３回講座の内容はどうでしたか。

満足	やや満足	やや不満	不満
12 63%	7 37%	0 ０%	0 ０%

②　第３回講座の進行や運営はどうでしたか。

満足	やや満足	やや不満	不満
7 37%	10 53%	2 10%	0 ０%

③　第３回講座の開催時期はどうでしたか。

満足	やや満足	やや不満	不満
13 69%	5 26%	1 ５%	0 ０%

※上段　人数（人）　下段　割合（%）

④　第３回講座で印象に残ったことや感想等を御記入ください。　※（　）の数字は同意見の人数

＜子ども＞
【幼少期からの学び支援】
・楽しかった。（２）　・植物や昆虫観察ができ，友だちもできた。　・多くの種類の植物や昆虫を観察できた。　・アリ地獄に触れることができてよかった。　・イトトンボをつかまえることができてうれしかった。　・大きなカエルがいたので驚いた。　・ヤモリをつかまえることができてよかった。　・カエルをつかまえたこと　・初めて見る植物が多く勉強になった。
【課題等】
・昆虫が少なかった。　・「クワガタムシの森」にも行きたかった。　・ヘビを見たかったが，見られずに残念だった。　・観察以外の活動もしたかった。

＜保護者＞
【幼少期からの学び支援】
・水や陸の生き物について学べてよかった。　・植物の名前や特性を学べてよかった。（初めて知ることが多かった。）　・子どもたちが，植物や昆虫を観察し，学ぶことができてよかった。
・植物やトンボの生態等について学ぶことができた。　・詳しい説明が聞けて，ためになった。
・身近な植物や昆虫を観察できてよかった。　・クワガタの取り方を教えてくれてよかった。
【家庭教育支援】
・子どもと仲良くなれた。　・休日の子どもとの過ごし方や子どもとの協同作業について学ぶことができた。　・自然の中での親子協同の勉強会はとても楽しく，その場で指導員の先生から説明や質問への答えを聞くことができてよかった。　・家族ではあまり行かない所へ来られてよかった。　・植物や昆虫について子どもと一緒に学ぶことができて，有意義だった。
【若い世代や子ども世代の参加推進】
・とてもよい環境の中で，充実した研修ができた。　・こういう企画ならではの経験ができてよかった。　・いろいろな種類の植物についての説明がおもしろかった。　・たくさんの昆虫を見ることができて，子どもが喜んでいた。
【課題等】
・もう少し自由に観察できるとよかった。　・もっと自由に採集できればよかった。　・時間が短いように思う。　・場所がわかりにくかった。　・クワガタを採りたかった。

⑤　親子で参加して，父親が子育てを楽しむためには，第３回講座（自然体験）として，どのような講座が効果的であると思いますか。

【幼少期からの学び支援】
・座学で昆虫ついての学習をするのもおもしろいと思う。　・夜の昆虫採集とキャンプ
【家庭教育支援】
・親子で何か工作をして触れ合う。（例えば，竹馬を作り，それで遊ぶ。）　・父親が，自然体験活動を通して，子どもを楽しませるスキルを身につけることができる内容。　・説明を聞くだけでなく，親子で考えながら活動するオリエンテーリングのような講座。

２　生涯学習課主催講座「親子で楽しむ体験広場」「子ども体験広場」

図８　生涯学習課主催講座のようす

生涯学習課主催講座のアンケート結果を以下に示す。対象：保護者25人（27世帯，59人）

①　講座内容についての満足度

満足	やや満足	やや不満	不満
21 84%	4 16%	0 0%	0 0%

②　進行・運営についての満足度

満足	やや満足	やや不満	不満
21 84%	4 16%	0 0%	0 0%

※上段　人数（人）　下段　割合（%）

③　講座で印象に残ったことや感想等を御記入ください。

＜子ども＞
【幼少期からの学び支援】
・できないことが出来るようになって嬉しい。　・毎回新しいことを学ぶことができて嬉しい。
・もっと上手になるよう練習をがんばる。
【家庭教育支援】,【若い世代や子ども世代の参加推進】
・いろんな人と交流できるのが良い。

＜保護者＞
【家庭教育支援】,【若い世代や子ども世代の参加推進】
・和やかな雰囲気が良い。　・受講者の中のお世話係の方に感謝している。
【課題等】
・１つのことだけをじっくり教えてほしい。　・月１回の講座を月２回に増やして欲しい。

３　平成27年度新規事業「ファミリー体験学習推進プロジェクト」

図９　ファミリー体験学習推進プロジェクトのようす

ファミリー体験学習推進プロジェクトのアンケート結果を以下に示す。対象：保護者57人（57世帯，153人）

①　体験学習をどこで知りましたか。

チラシ	ホームページ	新聞	その他
51 89%	4 7%	0 0％	2 4%

②　電子申請のみ（ＱＲコード）の申し込みについて。

よい	やりにくい	電話やﾌｧｸｼﾐﾘがよい	郵送がよい
43 75%	8 14%	6 11%	0 0％

③　参加しようと思った理由。（複数回答可）

興味を持った	勉強になる	会場が近い	参加費が無料	時期が良い
36 35%	33 33%	15 15%	13 13%	4 4%

④　内容はどうでしたか。

満足	やや満足	やや不満	不満
52 91%	5 9%	0 0％	0 0％

⑤　開催時期はどうでしたか。

満足	やや満足	やや不満	不満
53 75%	8 14%	6 11%	0 0％

※上段　人数（人）　下段　割合（%）

⑥　講座で印象に残ったことや感想等を御記入ください。

＜子ども＞
【幼少期からの学び支援】
・興味をもった。　・勉強になる。　・説明が詳しくてよく分かった。　・楽しかった。
・昔のおやつは，簡単に作れておいしかった。
【家庭教育支援】，【若い世代や子ども世代の参加推進】
・いろんな人と交流できるのが良い。　・家でも作りたい。

＜保護者＞
【家庭教育支援】，【若い世代や子ども世代の参加推進】
・勉強が苦手な子どもが，楽しんで学習している姿を見ることができた。
・とても良い経験ができ，感動した。　・チラシを見て，講座の内容がよくわかった。
・子どもにも作ることができ，いい勉強になった。
【課題等】
・夏休みの前半の方が良かった。　・運動会時期を避けて欲しい。

⑦　家族で参加できて，子どもの学習への興味関心を向上させるためには，どのような活動が効果的であると思いますか。

【幼少期からの学び支援】
・実験や料理　・遊びを通して学べること　・ものづくりや身体を動かす内容　・自然体験
・和楽器体験　・日本の伝統文化に関する内容　・防災について
【家庭教育支援】
・親子で活動出来る内容なら何でもいい。　・親子で競争しての調べ学習

４　考察

アンケート結果から，講座内容や運営，実施時期等への満足度は90％以上と高いことが確認できた。また，寄せられた意見・感想から，３つの研究仮説である幼少期からの学び支援，家庭教育支援，若い世代や子ども世代の参加推進の検証による成果とともに，課題等が明らかになった。

（１）仮説の検証による成果等

① 週休日や夏休みなどを活用し，家庭教育を支援する多様な学びの機会を提供することができた。

② 実地での直接体験活動を交えて，専門の講師の指導を受けることで，知識や技能を身につけるとともに，状況を観察したり，判断する力，疑問を持ち，解決する力などを育成することができた。

③ 親子での共同した学びを通して，親子の情愛を実感し，絆を深めることができた。

④ 多くの子どもや家族が協力し合い，それぞれの役割を果たしながら，集団での遊戯，野外活動や宿泊などを体験することで，子ども同士，大人同士，子どもと大人などの多様な人間関係づくりを学ぶとともに，規範意識や自己有用感を高めることができた。

⑤ 上記のような成果により，参加者の今後の生涯学習への学習意欲を高めることができた。

⑥ その他，募集活動の成果として，魅力があり，講座内容が分かりやすいチラシを作成したことや，ホームページやマスコミを活用するなど複数のメディアで広報したこと，ＱＲコードにより携帯電話から応募できるようにしたことで，講座の認知度が高まるとともに，応募者が増加した。

（２）今後の課題

① 初めて経験する活動や機器の操作等について，安全かつ適切に行えるよう，指導する補助員を配置する。

② 県内各地から現地集合するため，事前の事務連絡や，前回の講座の中で，集合場所までの経路や留意事項について詳細な資料を提供する。

③ 天体観測や海上や山間部での活動など，天候に左右される活動には，代替の活動ができるよう，講師や機器の準備をする。

④ 講座によっては応募者数が定員の２～３倍となることから，予算の許す範囲で，定員を増やすとともに，補助員を配置するなどして，安全面や実効面に留意する。

⑤ 夏休みや週休日等，多くの方々が参加しやすい時期に実施する。

⑥ その他，申し込み方法については，電子申請のみの場合，ミスも無く，効率的な事務処理を行うことができたが，「やりにくかった」「電話やファクシミリがよい」という意見もあることから，電子申請と電話やファクシミリを組み合わせるなど，申し込み方法について検討する必要がある。

Ⅴ　おわりに

子どもから大人までの生涯にわたる学びの基礎になるものは家庭教育である。特に幼少期からの家庭教育の取り組みが，その後の学校や社会での学びの充実・発展につながる。このような観点から，若い世代や親子での参加体験型講座の充実に向けた今回の研究実践は，魅力ある講座を企画して，意欲的な参加を促進すること，若い世代のニーズを満たし，学習意欲・学習効果を上げること，将来にわたり多くの人々と学んでいこうとする態度を育てること等について，一定の成果をあげることができたと考える。今後とも多くの方々のよりよい学びを支援する講座を企画していきたい。

教育情報システムを利用した教員の資質向上について

―研修申込みシステムの機能追加とその活用―

教育情報課　佐中 康弘

要　　旨

徳島県立総合教育センターでは，県内の公立学校教員が，県教育委員会主催の研修講座をウェブページ上で申込みできるシステム（研修申込みシステム）を平成17年度から運用している。

本研究では，教員の資質向上につながる教育情報システムの活用方法を探るため，研修申込みシステムがもつ教員の研修記録を年度別にデータベースに蓄積し，教員が必要に応じて自身の研修記録を確認できるようにシステムの機能追加を行うこととした。

キーワード：研修申込，研修履歴，教員の資質向上，システムの機能追加，校務の情報化

Ⅰ　はじめに

徳島県立総合教育センターでは，毎年，約700の研修講座を開講している。平成16年度までは，県内の公立学校教員が研修講座への参加を希望する場合には，書類による申込み手続きが行われていた。しかし，県内には約8,000名の公立学校教員が在籍しており，書類による申込み手続きの処理には膨大な時間を要していた。

そこで，書類による申込み手続きの処理を大きく改善するために開発されたものが研修申込みシステムである。研修申込みシステムはPHPをプログラミング言語として開発したものであり，平成17年度から運用を開始している。図１は「研修申込みシステムのトップページ」の画面である。このトップページは，徳島県立総合教育センターのウェブページからアクセスすることができ，画面右上にある「ログイン」をクリックし，学校管理者用のアカウントを入力することにより，各学校の管理者が所属教員の希望する研修講座の申込みを行うことができる。また，このトップページには二次募集の案内や欠席時の対応などの情報を掲載しているとともに，画面左上にメインメニューを配置している。メインメニューには「申込状況」,「研修講座実施要項」等のサブメニューを配置し，研修講座の申込み状況や実施要項を確認することができる。

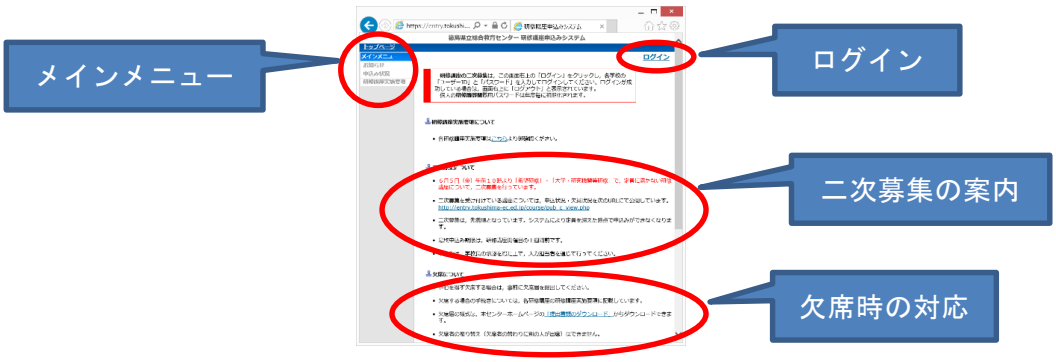


図１　研修申込みシステムのトップページ

Ⅱ　研究仮説

研修申込みシステムは平成17年度から運用を開始し，平成23年度からシステムのデータベース上に研修記録を蓄積している。この研修記録を教員各自が研修申込みシステムから確認できるようにシステムの機能追加を行うことによって，教員が必要に応じて自身の研修記録を確認し，今後の研修計画に役立てるなど，教員の資質向上につなげることができるのではないか。

Ⅲ　研究の実際

1　研修申込みシステムの概要

（1）システムの構成

研修申込みシステムは，サーバー内のデータベースに，ユーザー情報，講座情報，申込情報を持っている。また，システムを使用するユーザーとして，システム管理者，講座担当者，学校管理者がある。これらのユーザーは研修申込みシステムのウェブページから，それぞれのアカウントを用いてログインし，システム管理者は新規採用や異動教員の情報をもとにユーザーの登録を行い，講座担当者は研修講座の実施要項や出欠の入力，学校管理者は所属教員の研修講座の申込みなどを行う。

そして，今回，新たにデータベース上に研修の記録である履歴情報，研修申込みシステムのウェブページ上に研修履歴表示メニューを追加し，ユーザーとして一般教員を加えてアカウントを発行することにより，教員が自らの研修記録を確認できるように機能を追加した。図２は，今回の「システム機能追加のイメージ図」である。

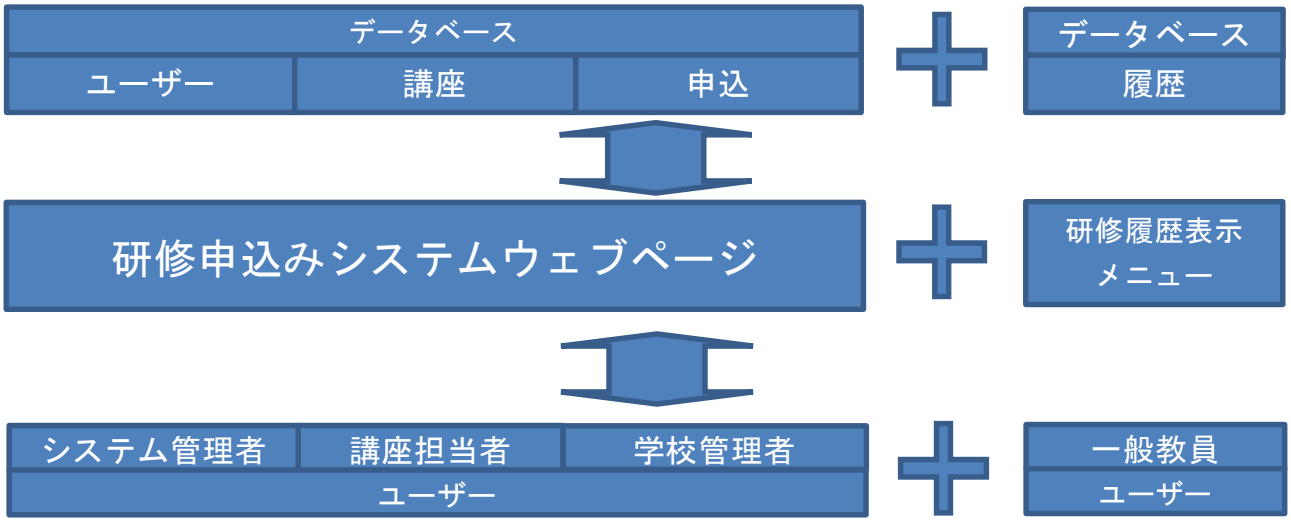


図２　システム機能追加のイメージ図

（2）システムの運用スケジュール（図３「平成27年度の運用スケジュール」参照）

①　年度当初にシステム管理者が研修講座のデータとユーザーの登録を行う。

②　４月中旬に講座担当者への説明会を行った後，講座担当者が研修講座の実施要項の入力を行う。

③　５月上旬から，学校管理者がシステムから所属教員の研修講座の申込みを行う。

④　研修講座の申込み期間が終了する５月中旬から，講座担当者が研修講座の定員等を考慮し，申込み者の受講可否を行う。

⑤　講座担当者は研修講座が終了次第，受講者の出欠の入力を行う。
⑥　研修申込みシステムを利用しない研修講座については，各講座担当者から提出された出欠記録をもとにシステム担当者が受講者の出欠の入力を行う。
⑦　研修講座の出欠入力が終了後，自動的にデータベースに受講記録が蓄積される。

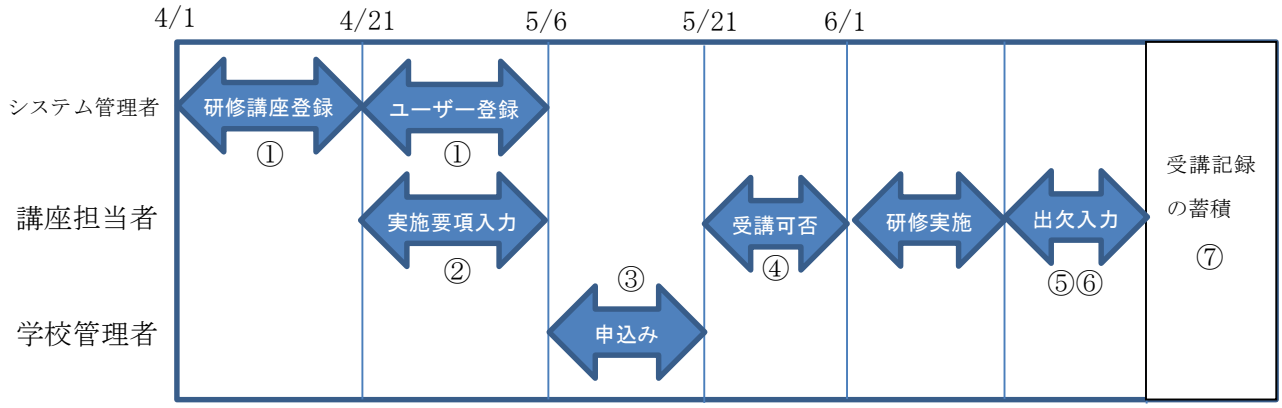


図３　平成27年度の運用スケジュール

（３）研修講座の登録

年度当初にシステム管理者が行う研修講座の登録作業は，システム管理者がログイン後，各種設定メニューから「研修/研修講座」を選択すると表示される，図４の「研修名一覧画面」上で行う。

図４　研修名一覧画面

この画面で追加・編集したい講座の「研修講座一覧」をクリックすると，図５の「研修講座名一覧画面」が表示される。

図５　研修講座名一覧画面

この画面で「新規追加」をクリックすると，図６の「研修講座データ編集画面」が表示され，研修講座名，定員，申込締切日などを入力し，「更新」をクリックすることで，研修講座の登録作業が完了する。

図６　研修講座データ編集画面

（４）研修講座実施要項の入力

講座担当者が行う研修講座の実施要項の入力作業は，講座担当者がログイン後，（３）の「研修講座の登録」と同様に，図６の「研修講座データ編集画面」を表示させ，「実施要項を編集」をクリックすると表示される，図７の「実施要項編集画面」上で行う。

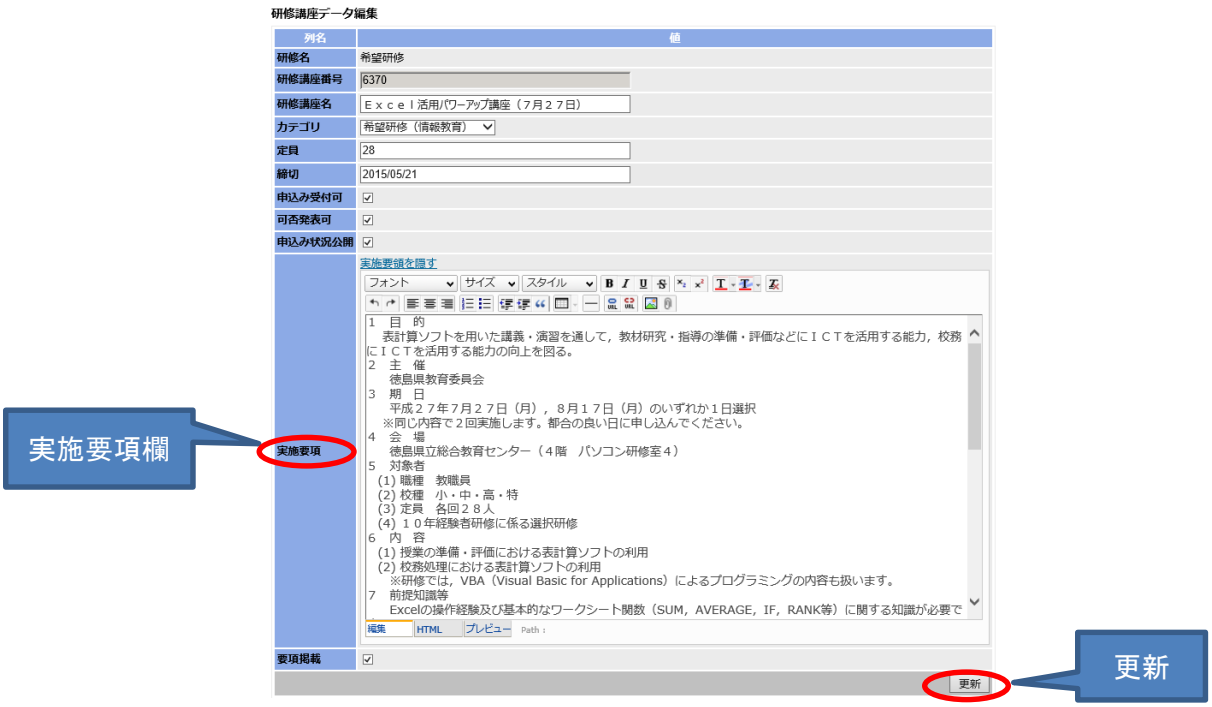


図７　実施要項編集画面

この画面で，会場，準備物，注意事項などを実施要項欄に入力し，「更新」をクリックすることで研修講座の実施要項の登録作業が完了する。

（５）研修の申込み

学校管理者が行う研修申込み作業は，学校管理者がログイン後，学校メニューの「申込み/受講確認」をクリックすると表示される，図８の「研修講座申込選択画面」上で行う。

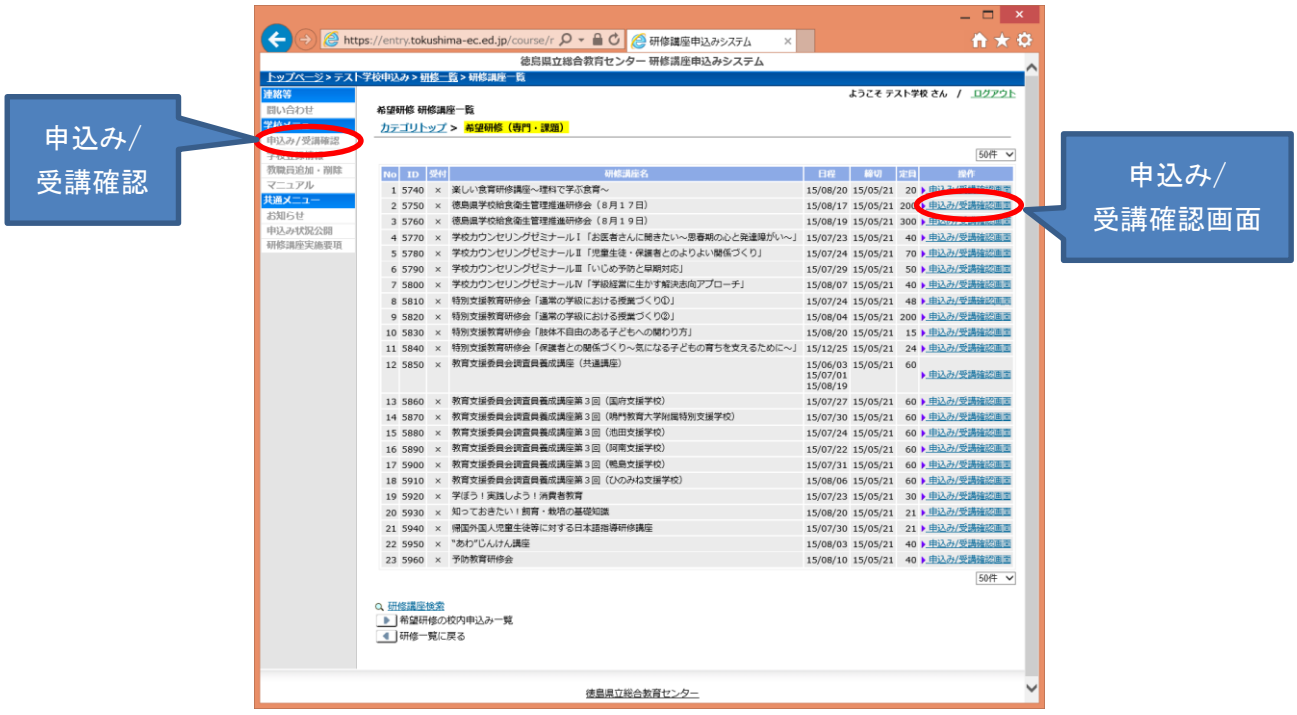


図８　研修講座申込選択画面

この画面で，申込みを行う研修講座の操作欄の「申込み/受講確認画面」をクリックすると，図９の「申込者一覧画面」が表示される。

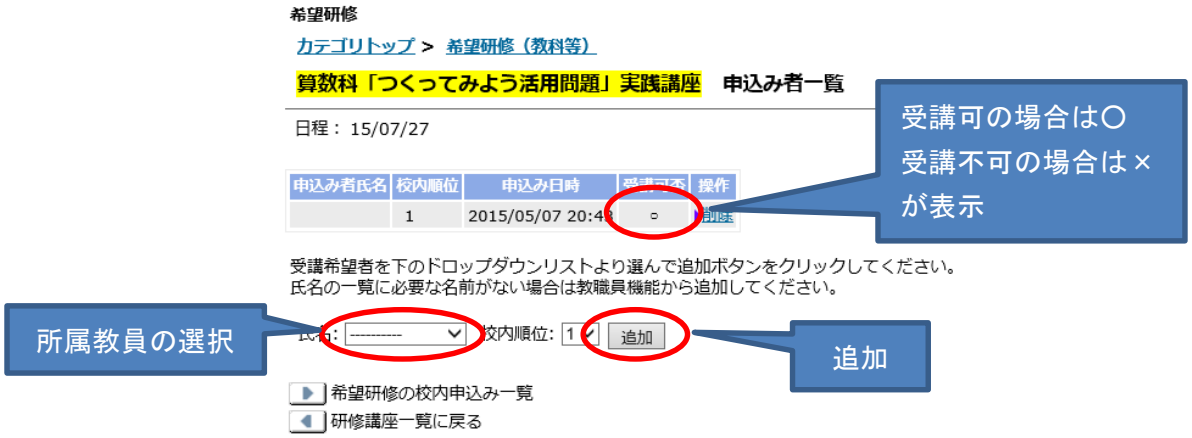


図９　申込者一覧画面

この画面で受講を希望する所属教員を一覧から選択し，「追加」をクリックすることで，研修の申込み作業が完了する。

（６）受講可否

学校管理者が研修の申込みを行った後，講座担当者が行う受講可否の作業は，講座担当者がログイン後，各種設定メニューの「受講可否等」をクリックすると表示される，図10の「受講可否画面」上で行う。

図10　受講可否画面

この画面で，講座担当者が研修講座の申込み数欄の数字をクリックすると，図11の「申込み者一覧画面」が表示される。

図11　申込み者一覧画面

この画面で受講を承認する教員の「受講可」欄にチェックを入れ，「設定を送信」をクリックすると，図９の「申込者一覧画面」で承認された申込者の受講可否欄に○印が付き，受講可否の作業が完了する。

（７）受講確認

研修の申込みを行った教員の受講可否は，学校管理者がログイン後，（５）の「研修の申込み」と同様に図９の「申込者一覧画面」を表示させ，確認することができる。申込みを行った教員が受講を承認された場合には，「受講可否」欄に○印が表示され，承認されなかった教員には×印が表示される。

（８）出欠の入力

研修講座終了後に講座担当者が行う出欠の入力作業は，講座担当者がログイン後，各種設定メニューの「受講可否等」をクリックし，担当研修講座の「受講数」欄の数字をクリックすると表示される，図12の「出欠入力画面」上で行う。

図12　出欠入力画面

この画面で，出席ならば１，欠席ならば０を入力し，「出欠の設定を送信」をクリックすると出欠入力作業が完了する。

２　研修申込みシステムの機能追加

（１）研修履歴データベースの作成

徳島県立総合教育センターのサーバー内にあるPostgreSQLのデータベースに研修履歴用のテーブルを追加し，研修申込みシステムに入力された年度別の研修記録データを蓄積していくよう機能追加を行った。図13は「研修履歴データベースの作成イメージ図」である。

図13　研修履歴データベースの作成イメージ図

申込みテーブルに申込み年度のフィールドを追加し，次年度になっても削除することなく申込みデータを蓄積するようにした。さらに，申込みテーブル，出欠テーブル，ユーザーテーブル，学校テーブル，研修講座テーブルを用いて受講記録テーブルを作成するようにした。

（２）研修履歴閲覧のためのプログラム改修

新たに作成した研修履歴データベースからデータを抽出して，所属及び教員ごとに研修記録を確認できるようPHPによるプログラム改修を行った。図14は「改修したプログラムの一部」で，ログインしたユーザーの研修記録を抽出し，表示させるプログラムである。

```
$criteria = new criteriaCompo();
if($term['type_id']!=""){
if($term['type_id']=="-1"){
$criteria->add(new Criteria('crct.is_base_crct', 'true', $operator='='));
                }else{
                $criteria->add(new Criteria('crct.crct_id', $term['type_id'], $operator='='));
                }
}
if($term['c_name']!=""){
                $criteria_sub1 = new criteriaCompo();
                $criteria_sub1->add(new Criteria('crct.crct_name',$term['c_name'] , $operator='~*'));
                $criteria_sub1->add(new Criteria('c.c_name',$term['c_name'] , $operator='~*'),'OR');
                $criteria->add($criteria_sub1);
```

図14　改修したプログラムの一部

（3）研修履歴表示メニューの作成

研修申込みシステムのトップページに研修記録を確認するためのメニュー（研修履歴表示メニュー）を追加した。また，履歴閲覧用アカウントでログインし，研修記録を確認できるようプログラムの改修を行った。図15は「研修履歴表示メニュー画面」である。

図15　研修履歴表示メニュー画面

3　研修履歴データベースの活用

（1）履歴閲覧用アカウントの発行

平成23年度から，市町村教育委員会や県内公立学校の学校長が所属教員の研修記録を確認できるよう管理者用のアカウントを発行している。また，平成26年度からは，県内の公立学校教員にもアカウントを発行し，教員が自身の研修記録を確認できるようにした。

図16は「教職員アカウント作成画面」である。システム管理者は，この画面から教員の氏名，フリガナ，学校名，役職名などを入力し，「追加」をクリックすることでアカウントの登録作業を行うことができる。

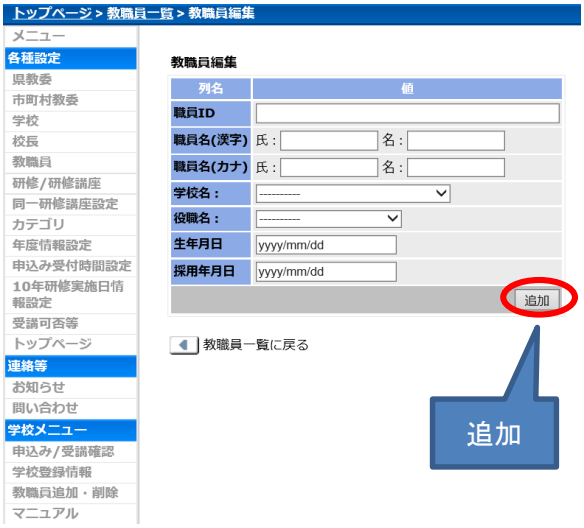


図16　教職員アカウント作成画面

（2） 履歴閲覧データベースの閲覧

教員が自身の研修記録を閲覧するには，教員がログイン後，履歴メニューの「研修履歴表示」をクリックすると表示される，図17の「研修履歴表示画面」により行う。

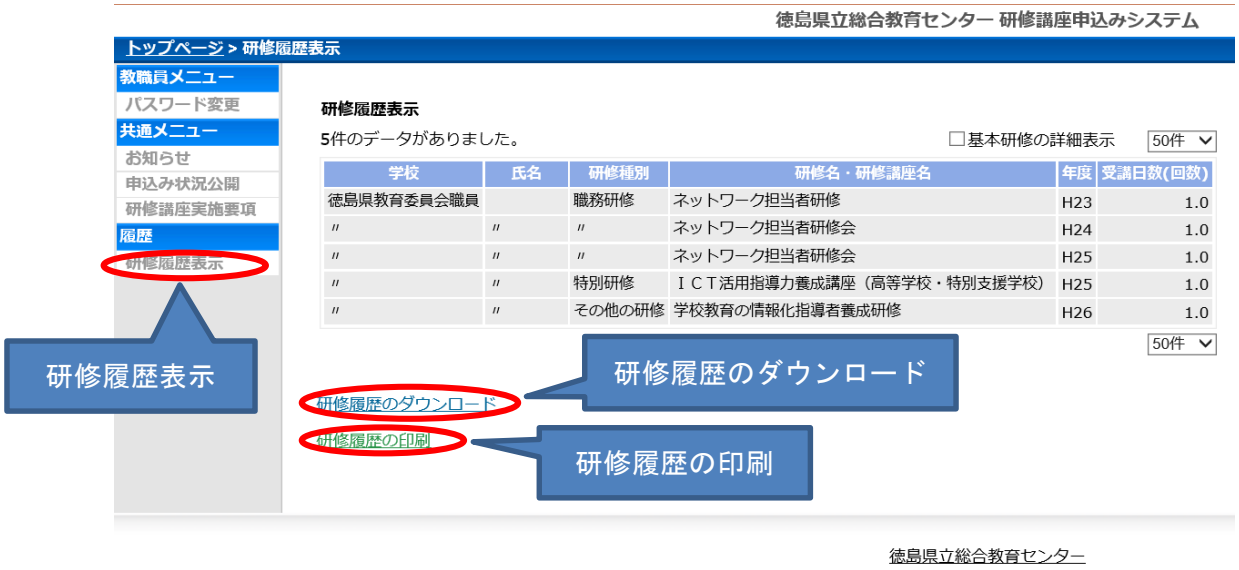


図17　研修履歴表示画面

この画面で「研修履歴の印刷」をクリックすると，図18の「印刷用画面」が表示され，研修履歴を印刷することができる。

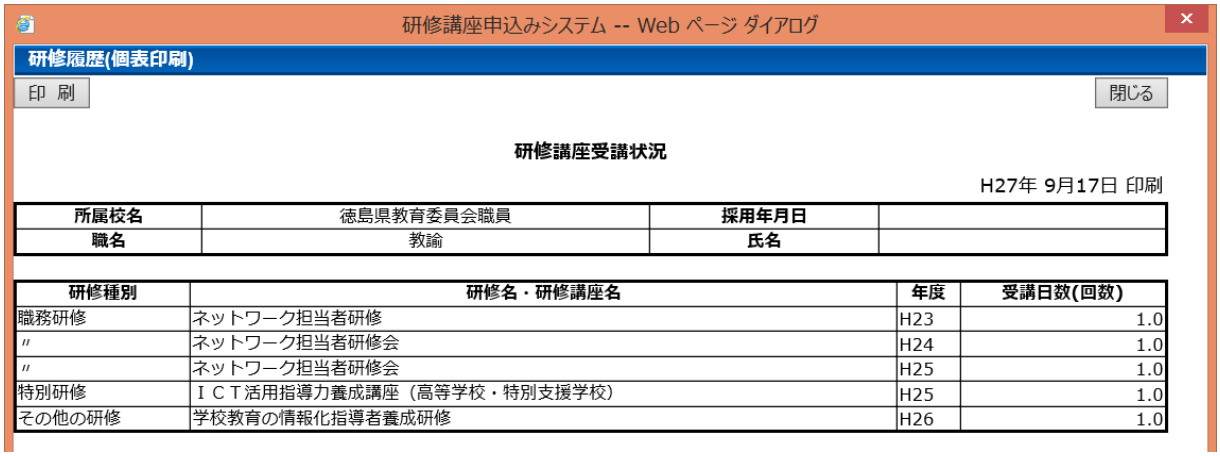


図18　印刷用画面

また，「研修履歴のダウンロード」をクリックすると，図19の「CSV形式データ」で研修履歴をダウンロードすることができる。

	A	B	C	D	E	F
1	学校	氏名	研修種別	研修名・研修講座名	年度	受講日数(回数)
2	あせび高等学校	総合　太郎	職務研修	ネットワーク担当者研修	H23	1
3	あせび高等学校	総合　太郎	職務研修	ネットワーク担当者研修会	H24	1
4	あせび高等学校	総合　太郎	職務研修	ネットワーク担当者研修会	H25	1
5	あせび高等学校	総合　太郎	特別研修	ICT活用指導力養成講座(高等学校・特別支援学校)	H25	1
6	あせび高等学校	総合　太郎	その他の研修	学校教育の情報化指導者養成研修	H26	1

図19　CSV形式データ

Ⅳ　研究の成果と今後の課題

研修申込みシステムは，従来の書類による申込み手続きの処理を改善するために開発されたものであり，研修講座の申込みや受講可否，出欠の入力などの一連の手続き処理をインターネットを活用して行うことにより，処理業務全体の軽減が図れるなど，大きな成果をあげることができた。

平成23年度からは，受講後の研修記録に年度と出欠の情報を持たせ，データベースに蓄積している。さらに，平成26年度には，この研修記録を教員自身が確認できるようシステムの機能追加を行い，教員が過去の研修を振り返り，今後の研修計画に役立てることができるようになった。また，図20のように従来運用していた手書き処理による受講記録カードを電子化することができた。

図20　受講記録カードの電子化

しかし，研修申込みシステムの導入が間もないことや，平成23年度から平成27年度までの５年間分の研修記録しか確認できないこともあってか，図21のように研修履歴データベースへのアクセス数はまだ少数にとどまっている。

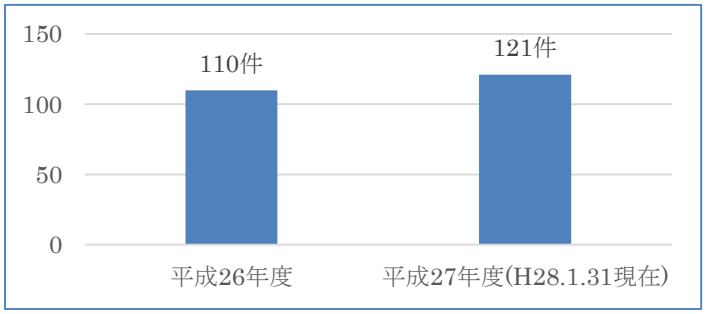


図21　履歴閲覧アクセス数

今後は，確認できる研修記録の増加に伴い，研修申込みシステムへのアクセス数が増えていくこ

とが予想されるが,さらにシステムの活用が図られるよう学校等への周知を行う必要がある。また,年度当初にシステム管理者が行う設定作業を簡略化できるように機能追加を行うことも今後の検討課題となっている。

Ⅴ　おわりに

徳島県立総合教育センターの教育情報課は，平成26年度に設置されて２年目を迎えている。当課が設置された目的は，教職員のICT活用指導力の向上や，デジタルコンテンツの充実といった児童・生徒のICT活用能力の育成に向けた取組をはじめ，教職員が児童・生徒と向き合う時間を増加させるための校務の情報化の推進，さらには，教育情報ネットワークの運用や情報機器の管理等の業務を一体的に行い，県内の学校における教育の情報化をより一層推進させることである。

今後は，当課が設置された目的を十分に踏まえ，県内の学校における教育の情報化に向けた取組を支援できるよう，本研究の研修申込みシステムの機能追加のような，教員の資質向上や校務の情報化に寄与するシステムの運用と開発に努めていきたい。

研　究　紀　要　第95集

発　行　日　平成28年3月

編集・発行　徳島県立総合教育センター
〒779-0108
徳島県板野郡板野町犬伏字東谷1-7
電話　(088)672-5000